聖徒の道　1976年5月20日発行（毎月1回20日発行）　第20巻第5号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道 5 1976

それははじまりなのです

クリスティー・ハンフリーズ

12歳の少年たちと言えば、陽気で物事に頓着しない年頃です。彼らの世界は結婚や政治などむずかしい責任からはほど遠い世界です。でも、彼らは永遠の結婚への道を歩んでおり、神権の仕事では、どの国家よりも完全に近い統治形態のもとにいます。

アロン神権はどんなクラブとも違います。会員券を買えば所属できるというものではありません。ただ免許証のように手渡されるものでもありません。アロン神権は按手によって授けられます。権能を持つ人から聖任されるのです。それは神様からの召しです。ふさわしいときにだけ与えられ、正しい権能によってだけ受けることができるものです。

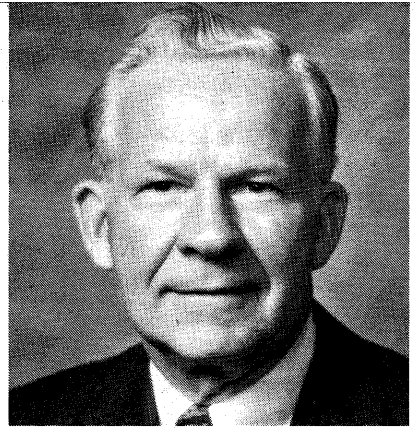
女性である私は神権を持てません。でも同年代の少年たちに神権を尊ぶよう励ましを与えることはできます。私はつつましくして、良い模範を示し、少年たちが集会に必ず出席して責任を果たすように力づけることです。このようにすれば、彼らはきっと高い目標と理想を掲げ、義務をよく果たすようになることでしょう。私は今、彼らに良い影響を与えることができますし、一緒に進歩成長することができます。私にとってアロン神権は、完全な新しい生き方のはじまりなのです。

私は良い模範のひとつとして清い生活を送ります。それはいつの日かあの聖壇に、ほかでもない、永遠の生命に向かって一歩を踏み出すあの聖壇に、ひざまずきたいからです。聖壇の向こう側には、清くふさわしい人、自分の神権を尊重する人を、と願っています。私は彼に最上のものを持ってもらいたい、自分も最上のものを持ちたいと思います。ですから、今どこかにいる未来の夫にも、同じことをまじめに考えていてもらいたいと思うのです。正しい生活をすれば、彼は執事から教師、そして祭司に昇進し、もっと高いメルケゼデク神権の召しにも進めます。

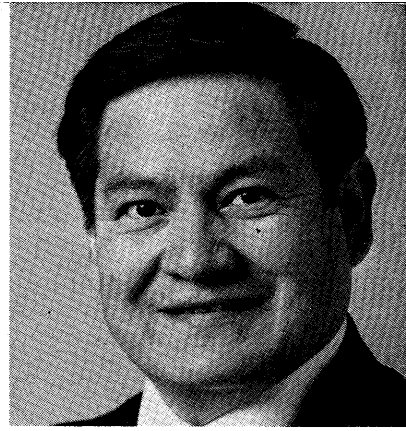
アロン神権は生き生きとしてさわやかな力強いもの、それははじまりなのです。

P. 227

P. 237



P. 234



P. 240

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ハワード・W・ハンター
デビッド・B・ヘイト
ロバート・D・ヘイルズ
O・レスリー・ストーン

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）
ロジャー・ギリング（デザイナー）

「聖徒の道」

八木沼　修 一（日本語コーディネーター）

1976年　**5月号**

もくじ

清さをたたえる……N・エルドン・タナー……218
執事の力……ウイリアム・G・ハートレー……220
管理監督ビクター・L・ブラウン
未完成の仕事を果たすチャレンジ…ローウェル・M・ダーハム・ジュニア……223
質疑応答……225
「年次地区集会」新設さる……228
おくびょうチンカイ……バーナディン・ビーティ……229
こうふくになったおおさま……マーベル・J・ガボット……232
ちいさなおともだちへ……マービン・J・アシュトン……234
おもちゃばこ……236
福祉活動に占める扶助協会の役割…バーバラ・B・スミス……237
知恵の泉……238
人物さがし……ジョン・A・トゥベッドネス……239
「七十人」その歴史……S・デルワース・ヤング……240
母親のように……アーデス・G・カップ……243
断食と祈り……スペンサー・J・コンディ……246
ローカル・ニュース……247

聖徒の道 5月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－10－25
定　価　年間予約1,700円　1部 150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

清さをたたえる

第一副管長　N·エルドン・タナー

「私たちは、あなた方が清い生活をすることからもたらされる祝福を忘れないように、また絶えず厳格に貞節を守るように願う。この道によってのみ神の選り抜きの賜がもたらされ、主のみたまがあなた方と共にいて下さるのである。清い生活をしている人は誉れ高い。彼は白日のまばゆい太陽の光を浴びながら堂々と歩いて行く。なぜなら、道徳的な弱点がないからである。彼にはまた、どんな卑しい中傷の矢も届かない。その鎧にはきずがなく、その高潔さを疑う者はいないからである。彼は一点の非難するところもない生活をしている。また罪がないので、その顔に恥を塗られることもない。彼は全人類から誉めたたえられ尊敬される。非難のしようがないからである。彼はその少しも失われない清さの故に主の愛を受ける。前途には昇栄が待っているのである。」

（大管長会メッセージ　1942年10月2日）

「清く汚れのない若者はいかに誉れ高いことであろう。天使のようである。このような若者は、この世にあっては尽きせぬ喜びを、来たるべき世にあっては永遠の幸福を得るのである。」（大管長会、1942年4月6日）

皆さんに、この人生で何を得たいと思うか、この人生での最終的な目標は何かとお尋ねしたら、皆さんはきっと幸福になりたい、愛されたい、尊敬されたい、そして天の王国で救いと昇栄を得たいとお答えになるであろう。いずれも崇高な目標であり、だれもが追求すべきものである。しかし、ただ求めるだけでは十分ではない。なぜなら人生の価値あるものは、代価を払って初めて手にすることができるからである。

道徳的な清さはこの上なく尊いものである。それは金銀では買えない。義にかなった生活をすることが、私たちの払う代価なのである。従って、永遠の幸福という何にも換え難いものを獲得するためには、さらに多くの代価を払わなければならない。ここで、ガラテヤ人に宛てたパウロの勧告に注目してみよう。パウロはこのように語っている。

「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。

すなわち、自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊から永遠のいのちを刈り取るであろう。」（ガラテヤ6：7、8）

道徳的な清さすなわち貞節は、宗教を信じる人々の専売特許ではない。立派な家庭や健全な社会、強大な国家を望む心ある人であればだれしも当然守るべき礼儀の規準なのである。

では、道徳的に清ければどのような恩恵がもたらされるのであろうか。そのことについて少し考えてみよう。私たちはまず、慎ましく、清く、汚れのない者には数え切れないほどの利点はあっても、不利な点は全くないことに気づく。私たちは決して自らの行為を恥じる必要はない。愛する者を悩ましたり傷つけたりすることもない。また、驚くほどの速さで社会全般に広がりつつある性病に感染することもない。しかし何にも増して大切なのは、天父の戒めに従順でいられることであろう。

若いふたりが互いに清く汚れのないことを認め合って、神殿の聖壇に向かい合えることは、何と麗しく栄えあることであろうか。ふたりは相互の信頼と尊敬をいしずえに新しい家庭を築こうとしている。そして、ふたりの間に誕生する神の霊の子供は、ふたりが神に仕え、神の戒めを守るときに「地に満つるすべてのもの」を受け継ぐであろう。

チャニング・ポロックはこのように述べている。「世のすべての人が女性の純潔、男性の高潔を信じ、そのような生活をしていれば、世界は大きく変わり、壮麗な住み家となるであろう。」（「リーダーズ・ダイジェスト」1960年6月号　P．76）

この世はあなた方が自らの力で築き上げ、自らの力で生活を楽しむ所である。このことを今、心していただきたい。世の誘惑や苦難に屈服しないことを決心するのは今である。この重要な問題に対するあなたの選択ひとつで、あなたはすべてのものを手にすることにも失うことにもなるのである。

私たちの教会には、世の誘惑に負けないで生きようと決意している選り抜きの若者が大勢いる。彼らは近代の啓示を通して与えられた比類ない約束を自らのものにしたいと望んでいる。

「……絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、……

聖霊は常に汝の伴侶となり、……汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。」（教義と聖約 121：45、46）

第2次世界大戦中、教会員のことを懸念した大管長会は、不貞という攻撃に対して警告のメッセージを出している。結びには次のようにある。

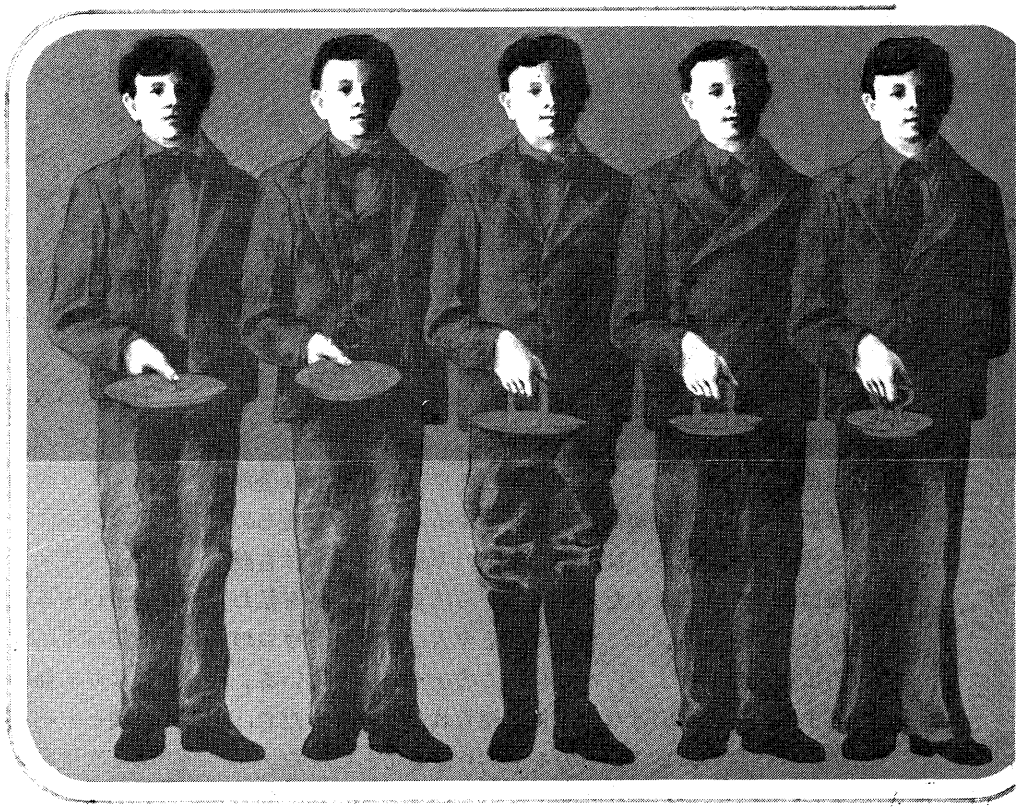
「私たちは、あなた方が清い生活をすることからもたらされる祝福を忘れないように、また絶えず厳格に貞節を守るように願う。この道によってのみ神の選り抜きの賜がもたらされ、主のみたまがあなた方と共にいて下さるのである。

清い生活をしている人は誉れ高い。彼は白日のまばゆい太陽の光を浴びながら堂々と歩いて行く。なぜなら、道徳的な弱点がないからである。彼にはまた、どんな卑しい中傷の矢も届かない。その鎧にはきずがなく、その高潔さを疑う者はいないからである。彼は一点の非難するところもない生活をしている。また罪がないので、その顔に恥を塗られることもない。彼は全人類から誉めたたえられ尊敬される。非難のしようがないからである。彼はその少しも失われない清さの故に主の愛を受ける。前途には昇栄が待っているのである。」（大管長会メッセージ　1942年10月2日）

◇　　◇

執事の力

ウイリアム・G・ハートレー



記録の天使のほかに、これまで教会で働いてきた執事の数を正確に数えることのできる人がいるだろうか。タイタス・ビリングズ、セレネス・バーネット、ジョン・バークの3人が、回復された教会で最初の執事に聖任されたのは、1830年から31年にかけてのことである。

統計（1854年には95人の執事、1906年には18,000人、現在では約15万人）と回転率（2、3年執事として働くとする）とを基礎にして算出すると、内輪に見積っても、これまでに 200万人以上の執事が聖任されたことになる。主が、この末の時代に主の王国で働く執事をこれ程多く召されたからには、その執事の職に、非常に重要な責任が課せられているにちがいないのである。

執事の時代の心温まる思い出

教会の指導者の多くは、執事の力に感動した経験や、自分が執事の頃の心暖まる思い出などを記録に書き残している。1世紀程前の例を引用してみよう。ジョン・スミスというイギリス人の改宗者は、大人になってから、「11歳のとき、教会に入り、15歳のとき（1851年）執事に聖任され、それまでに感じたことがない程の力を感じた」と回想している。もう少し今世紀に近いものとしては、七十人最高評議員会会長であったジョージ・レイノルズ長老の記録がある。彼も、短期間ではあったが執事として働けたことに感謝の気持を述べている。

「私が教会で召された数々の責任の中で、最も力を尽くしたものは執事の職である。

私は集会に出席できる状態の時に、決して集会を休んだことはなかった。礼拝行事の始まる1時間以上も前に集会所に行っていることがたびたびであった。入口を開け、部屋を整えるためである。また私は、あらゆる物をきちんと整理することに非常な喜びを感じていた。座席のほこりは払ってあるか、夕方にはガス灯に火がついているかなど、聖徒たちが気持よく集会に集えるよう、細々した事柄すべてを整えたものである。私は後にさらに重い責任を与えられたが、執事の仕事程大きな喜びと満足感とを与えてくれたものはなかったと思っている。」

もっと最近の例では、前東部諸州伝道部長のジェームズ・H・モイル兄弟が、1940年代に書いたものがある。その中で彼は、自分が執事の召しを受けてから、実際に振る舞いがどれ程変わったかを指摘している。監督から執事の召しについて話があったとき、ジェームズ少年は、ワード部の腕白たちとつき合っていたため、ちょっとためらったが、すぐにそれを引き受けることにした。

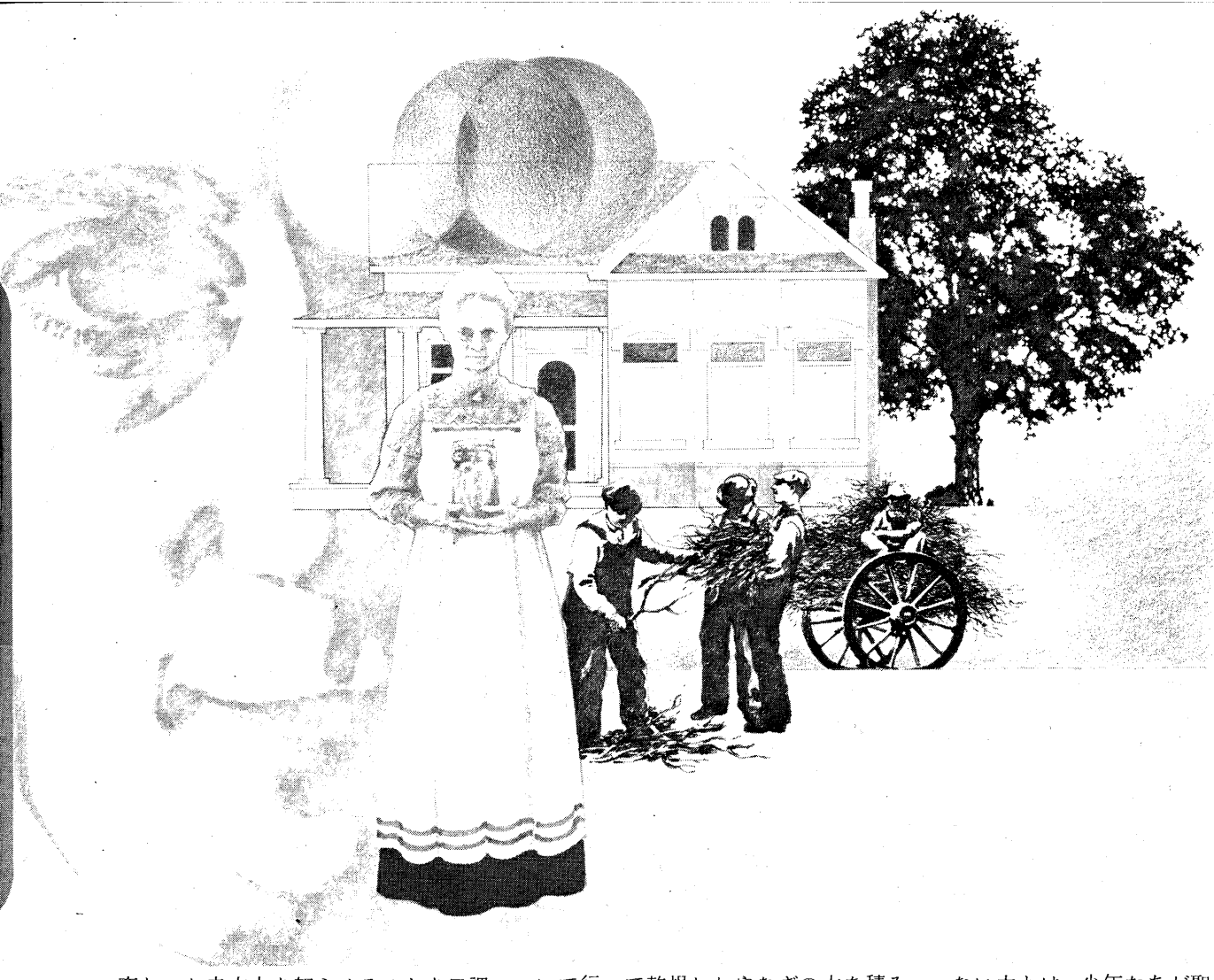
「私はしだいにその腕白仲間とつき合うのを止めるようになり、執事の責任を果たすことに没頭しました。そのために、監督が、ワード部の中で一番立派だと言ってくれた程でした。私たちは集会所の清掃をしました。掃き、モップをかけ、ほこりを払い、ランプの油を入れ、灯心を削り、火をともすといった、管理人の仕事をすべてしました。集会所をいつも整理し、出入口に気をつけました。……私たちは当番をきめて集会所の掃除をしましたが、ひんぱんに順番が回ってきました。でも、私はその仕事を本当に一生懸命に果たし、それ以来、片いじになることも、不信心になることも決してありませんでした。」

なぜそうなのだろうか。この3つの例を読みながら、なぜ人は年を取ると執事として働いた頃をなつかしく思うのか考えてみたい。この神権時代における執事の働きの歴史をながめて見ると、このような思い出が生まれる理由として、少なくとも3つの確かな理由が挙げられそうである。交友、奉仕、個人の成長がそれである。

交友

モイル部長が言ったように、子供の標準は、交わる仲間によって決まる。少年がひとたび執事定員会の中に入ると、その定員会の仲間たちは、よく一番仲の良い友達になる。すると、お互いに良い方に影響し合うようになる。そのことは次の出来事の中にうかがえる。

ウイリアム・スマートは、少年の頃、遊び友達と一緒になって、近所の一風



変わった未亡人を怒らせることを日課にしていた。そんなある日、その少年たちは皆、執事に聖任された。

「執事としての自覚が、私の心の中に多少とも芽生えました」とスマート兄弟は言っている。「私は自分から進んで、しかも喜んで、仲間の執事と一緒になって、困っている人々や集会所のために、まきを割るようになりました。」

ある日、また例によっていたずらの種を捜していたその執事たちは、あの未亡人の屋敷の前に集まり、今度はどんな方法であの老婦人を怒らせようかと相談を始めた。しかし、このたびの結論は、今までとは全く異なっていた。

スマート兄弟はその思い出を次のように語っている。「以前にその場所で会って以来、そこに集っている少年の中には、その生活がいつの間にか変わってしまっていた子もいました。今や聖なる神権を持つ執事だったのです。」

ひとりの少年が、いたずらなどやめて、あの婦人の荷馬車を山の所まで引いて行って乾燥したやなぎの木を積み込み、それを運んで来て、その木を割ってまきを作ってあげようと言い出した。他の少年たちも、彼が冗談を言っているのではないことがわかると、その提案に心から賛成した。

ところが当の未亡人は、少年たちが荷馬車を引いて行くのを見ると、ひどい非難の言葉を浴びせた。それから彼女は隣家へ駆け込むと、ありったけの怒りをまき散らした。その古い荷馬車が乾燥したやなぎの木を一杯に積んで戻って来た時に、彼女はどれ程驚いたことか。その上、ほこりと汗で汚れた少年たち、しかもこれまでたびたび彼女を悩ましてきた少年たちが、一生懸命に彼女のためにまき作りを始めたのである。彼女はしかり、笑い、泣き、そして最後にこう叫んだ。「何て素晴らしい子供たちなんでしょう。今まで私にしてきたことは、みんな許してあげるわ。」彼女も少年たちも、「何か暗黙の力が働いて変化が起きた」ことを知っていた。そして、その目に見えない力とは、少年たちが聖任の時に授けられた新しい力であり精神だったのである。

奉仕

執事たちは、教会歴史のどこを見ても、ただ集会を開くだけに甘んじているようなことは決してなく、常に教会の重要な責任を果たしている。教師や祭司や監督を助けて、数々の有益な仕事をしてきた。例えば1世紀前には、執事の第一の責任は、ワード部の集会所の管理であった。

「集会を快適なものにするということに関しては、執事に大きな責任がある」と、1874年に執事のマーク・リンゼイが語ったという。「私たちは、遅くとも集会の始まる1時間前に、集会所に着いていなければならない。集会所を美しく、清潔に、また暑からず寒からずの状態にすること。……また聖餐のトレイやテーブルや布を清潔にすること、また常時清潔な状態に保っておくこと。」

貧しい人々に関心を払うことも、やはり、執事の務めの大切な点である。特に断食の捧げ物を集めることがそうである。昔の執事は、断食の捧げ物を集めるのに、今よりもずっと冒険をしたのではないかと思う。執事がふたりずつ組になって、父親の荷馬車を借りて責任区域を回り、一軒一軒家を訪ねて、箱やかごやびんや包みをもらって荷馬車に積み込むのである。現金はほとんどなかった。例えば、ユタ州プロボのふたりの執事は、1903年に、断食の捧げ物として次のようなものを荷馬車に積み込んだと記録している。「ベーコン 750グラム、現金40セント、果物1びん、干しぶどう1袋、かき1かん、小麦粉16キロ」

断食の捧げ物を集める以外にも、執事たちは、肉体労働を提供することによって、困っている人々を援助している。家のペンキ塗り、落ち葉の掃除、歩道の雪かき、使い走りなどである。次の話は、今から80年程前の出来事で、執事たちが自分のワード部のふたつの家族を助けたことが記録されている。

「5月10日、執事定員会は、監督会の同意を得て、ある姉妹のビート畑に集まった。その姉妹の御主人は最近亡くなったばかりであった。定員会では、親戚の助けも得て、総勢68名が集まり、作業に取り掛かった。作業が終わるまでに、3.5ヘクタールのビート畑を耕した。この作業によって、この姉妹の家族は随分と荷が軽くなった。この時、姉妹の家族は、ひどくお金に困っていたからである。

数日後、執事たちは、今度は別の未亡人の姉妹の農場へ出かけた。ここでもビート畑を数ヘクタール耕した。」

すでに1870年代に、ある監督たちは、聖餐を配るのを執事の責任にしていた。教会全体にわたって、聖餐を配るのが執事の責任になったのは、今世紀に入ってからである。この責任は、執事の果たすべき責任が書かれている興味深い一覧表の中に、項目のひとつとして挙げられている。この一覧表は、第一次世界大戦の頃、教会が発行したものである。

断食の捧げ物を集める
監督のメッセンジャーとして働く
聖餐を配る
未亡人と老人のために燃料を準備する
貧しい人々の面倒を見る
通知書を配る
集会中オルガンに空気を送り込む
教会の敷地を整備する
墓地の管理を助ける
集会所の中を整理整頓する
集会所の敷地の管理維持にあたる
初等協会の仕事を助ける
宗教クラスの仕事を助ける
案内人として働く
ボーイスカウトの仕事をする
出入口の番をする
特別な連絡を告げ回る

個人の成長

確かに交友と奉仕を通じて、執事たちは昔も今も、重要な行動型式、態度、自分たちの宗教の考え方などについて学んでいる。教会統治の根本原則である管理の職について早くから教えられる。責任を与えられた執事たちは、それを実行して、その成果を指導者に報告しなければならない。また、困っている人々を助ける時に、思いやりの気持も養われる。また聖餐を配る時に、礼拝と尊崇の念が養われ、監督や教会幹部のために仕事をする時、彼らに対する尊敬の気持も生まれる。

それに加えて、執事たちは、その定員会集会で、正式な福音教育を受ける。教会のレッスンの手引きができる前の時代では、その集会をいかに有効に使うかは、執事自身の決定に委ねられていた。その当時の記録を読むと、定員会集会をかなり立派に計画し、中々うまく運営していた様子がうかがえる。例えば、1世紀前の一般的な執事の集会は、開会の歌、祈り、前回の記録の確認、それから何か道徳的な話をし、聖典を読み、歌を歌う、というものであった。またその間、随所に福音の話を織り込み、歌い、またしばしば証を述べることもあった。

そのためか、思いがけなく、このような定員会集会が大きな福音の理解を生み出し、公の場で話す勇気や歌の経験をも与えていた。

1908年になって初めて、執事定員会の集会のために、体系的な教科課程が準備された。それ以来、何年にもわたって、管理監督会が、入念に準備された数多くの教科課程と、様々なレッスンの手引きを発行しているのである。これらは皆、執事に宗教的な原則と義しい行ない、すなわち福音の理論とその応用を教えるものである。

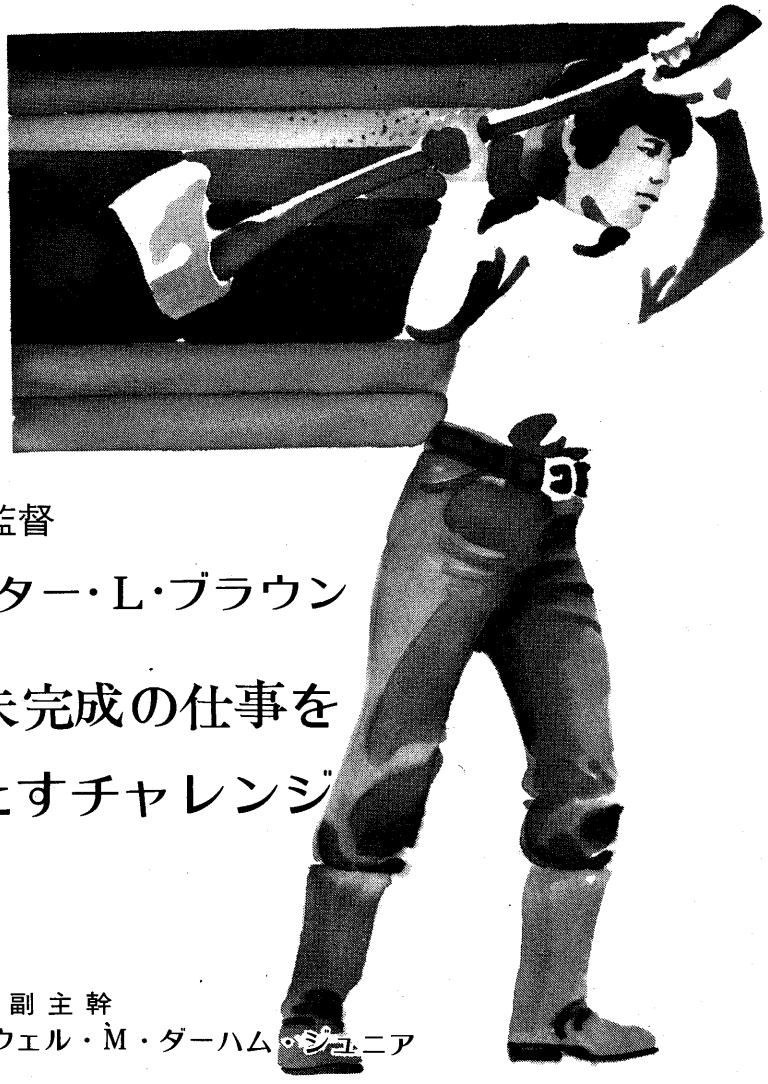
執事の仕事には、こうした3つの特徴――交友、奉仕、個人の成長――があるため、長い間神権の業に携わってきた年長者も、執事の時代のことを、感謝の気持で思い起こすのである。神権というはしごを執事として働くことからのぼり始めた、なつかしい時代なのである。執事がいなければ教会はかたわになる。

教会を前進させているのは、ほかでもない、神権の力である。そして執事の力が必要不可欠である。執事の力がなければ、教会はふたつの点で窮地に陥ることであろう。まず第1は、監督やその他の人々は、執事がするはずの仕事を自分たちでしなければならなくなるため、これまでしていた仕事の一部を割かなければならないということである。第2は、恐らくこれが一番大切なことであろうが、執事の年代層がもしいなくなれば、2年後に教師はいなくなり、4年で祭司もいなくなるということである。そして、10年か20年経てば、メルケゼデク神権定員会の様々な役職が、備えのできた、資格ある成人によって満たされるということもなくなるであろう。アロン神権で準備した人がいないためである。

ブリガム・ヤングの時代には、執事や他のアロン神権者たちは教会の足であると言われていた。この足がなければ教会はかたわになってしまうのである。しかし同時に大切なことは、アロン神権での経験がなければ、少年たち自身もかたわになってしまうことである。そのため、執事の力は、教会のためにも役立っているし、執事のためにも役立っているのである。

200万人の執事。これだけいれば、交友も、教会の奉仕も、個人の成長も絶えることはない。そして、私たちがそれにじっくりと取り組むとき、数字の上だけでなく、実際にこれらの成果が得られるのである。そしてこのことに記録の天使も、私たちの天父も、最も関心を寄せておられるのである。

写真の背景に使われている記録は、ユタ州ハンツビルの執事および教師定員会の議事録の1ページである。この記録の書かれた当時、デビッド・O・マッケイ大管長は、まだ年若い執事であった。



管理監督

ビクター・L・ブラウン

未完成の仕事を果たすチャレンジ

編集副主幹
ローウェル・M・ダーハム・ジュニア

ジェラルド・ブラウンは息子に、一見手に負えそうもないほど多くのまきを割るようチャレンジした。カナダのアルバータ州カードストンの見事に晴れ上がった秋の日の朝のことである。ビック・ブラウン少年は、こんな日には、アルバータの大草原に遊びに出て、すがすがしい朝の大気の中で馬を乗り回したい思いで一杯だった。しかし、彼は父を尊敬していた。彼は父から、同年代のどの少年にも負けずにたくさんのまきを割ることを期待されていることを知っていた。それは、父が息子に与えた特別なチャレンジであった。それに、ビクター・リー・ブラウンもそのようなチャレンジが好きで、真っ向からそれに立ち向かったのであった。ブラウン家にとって、まきは調理のためにも暖房のためにも必要なものであった。またビックは、まき割りは単なるチャレンジではなく、家族を支える重荷を分かち合うために必要なことも知っていた。彼は、若々しい手に斧を軽やかに握りしめて、まきを割り始めた。斧を振り降ろすたびに、ビックは心の中に何か暖かいものが湧き上がるのを感じた。斧の快い音と、割れたばかりの丸太のかぐわしい香りとは、仕事の報酬の一部であった。しかし、最上の報酬はそれから5時間近く経った後、最後の丸太を割り、全部積み上げてしまった時に与えられるのであった。暖かい気持と疲労感が体に満ち、自分が立派に仕事を果たしたことを意識するのである。父からの感謝の言葉も同じように、暖かく、思いやりあふれるものであった。そして父は自分の息子が大人並の仕事を立派に果たしたことに、いささか驚きの色を見せるのであった。

ビクター・L・ブラウンは、このまき割りの仕事をしていた頃は、執事定員会の第一副会長であった。彼は責任を引き受け、未完成の仕事を果たすというチャレンジを愛する少年であった。やがて将来、カードストン出身のこの若き執事に、数多くの偉大なチャレンジが与えられることになっていたのである。

現在、ビクター・L・ブラウンは末日聖徒イエス・キリスト教会の管理監督である。また、全世界のアロン神権と、同年代の若い女性の指導者でもある。愛と理解と誠実さと高潔さとあらゆる仕事をなし遂げたいという絶えざる望みとをもって、彼は神の王国の建設というチャレンジにその身をささげている。そして青年男女に、教会員としてそれぞれの責任を受け入れるよう、準備をさせているのである。

ブラウン監督は、1961年9月に、デビッド・O・マッケイ大管長によって、ジョン・H・バンデンバーグ管理監督の第二副監督に召された。その後、1972年4月9日、ブラウン監督は、リー大管長によって教会の管理監督に任命された。1972年以来、他の教会幹部と同様、彼は全時間を教会のためにささげているのである。

ブラウン監督の平均的な一日を紹介してみよう。（もっとも、彼の毎日は本当の平均的な日など一日としてないのだが）朝は5時半か5時45分には起床する。簡単に朝食をすませると、いつも6時半には事務所に向かっている。彼の仕事は通常午前7時に始まる。そして忙しい日には、昼食を取る時間さえないほどである。ブラウン監督は、ふたりの副監督とたびたび会合を開き、また毎週大管長会と会って、彼の職務に関する様々な問題について話し合う。

彼は、教会の運営の外形的な事柄について、実に広範な責任を負っている。また、アロン神権と若い女性の組織の仕事に加えて、全世界のアロン神権の長でもある。ワード部の監督が各々のワード部のアロン神権の長であることから、教会の全監督の指導者としての責任も負っている。また彼は、教会の医療奉仕プログラムにも責任があり、また福祉活動プログラムを指導する極めて重要な仕事もある。ブラウン監督と彼の副監督は、教会の什分の一と献金を受け取る責任があり、また什分の

一処理評議会（教義と聖約　120章参照）の会員として、大管長会ならびに十二使徒評議員会と共に会合する責任がある。管理監督会事務局はまた、会員記録に関する責任がある。この遠大で重い職責を果たすために、ビクター・L・ブラウン監督は、日々その精力と才能を傾けているのである。

毎週一回、夜、ブラウン監督はH・バーク・ピーターソン副監督と共に、アロン神権と若い女性の組織の人々と会合を持つ。ブラウン監督は教会の若人に対し心からの深い愛情を抱いている。そして彼らの福利のために何時間も費やしている。フェザーストーン副監督の話によると、よくブラウン監督は、教会の青年男女から、何か資格を得たとか、問題を抱えているなどという手紙を受け取ると、手紙を半分も読まないうちにポケットからハンカチを取り出して、目にたまった涙をふいているということである。彼は、この大いなる世代の若人をそれ程誇りに思っているのである。そして、彼らの成功には思いやりと同情とを示し、彼らの失敗には、深く愛情あふれる関心を示しているのである。

ブラウン監督とふたりの副監督は、管理監督会の関係する問題を話し合うために、たびたび彼の事務所で会合を持つ。ふたりの副監督は一様に、ブラウン監督には、素晴らしいユーモアのセンスがあることを指摘している。

しかし平生のブラウン監督はまじめで精力的で献身的な人である。管理監督会のピーターソン第一副監督は、ブラウン監督について次のように語っている。「彼を知り、またどんなものが彼の心を打つかを知っている人々は、彼がだれにも増して献身的であることを知っています。彼は本当に世界中のアロン神権の責任をひしひしと感じています。また若い女性に対しても同じように強い気持を抱いています。そのことを彼はいつも口にしているわけではありませんが、そのことで彼は寝食を忘れ、悩み、絶えず思いをはせているのです。彼は休息をとる時間もほとんどないほど、その仕事に打ち込んでいます。」

フェザーストーン副監督は、彼についてこう語っている。「彼は、だれにも劣らず自分の職務をよく理解しています。私は、ワード部の監督たちが、ブラウン監督が全世界のアロン神権の長としての仕事を理解しているように各々のワード部のアロン神権の長としての役割を理解してくれたらと願っています。そうすれば、アロン神権の活動においても若い女性の活動においても、これまで教会の歴史では見られなかった程の隆盛が見られることでしょう。」

ブラウン監督は数多くの偉大な指導性を具えている。そしてふたりの副監督はいつも決まって一番にそれを指摘する。ピーターソン副監督は、ブラウン監督の耳を傾ける能力について激賞している。「ブラウン監督はいつでも聞く用意ができています。私はこのことにいつも驚いています。私は実業界で数多くの偉大な人々をながめてきましたが、彼らが心を固く閉ざす様をしばしば見受けました。しかし、ブラウン監督は、私が会った人の中でも極めて精力的で意欲的な人の部類に属していながら、いつでも立ち止って耳を傾ける余裕を持っているのです。」

ブラウン監督は、自分の家族に対し、静かな愛情を抱いている。また教会の若人に対しても、大きな愛と献身の気持を抱いている。ブラウン監督の人柄を表わすものとして、人々は、決まって同じふたつの言葉を言う。それは誠実と高潔である。

夕食後、ブラウン監督は、小さなかばんを持って、居間に向かう。彼の右手のテーブルに置いてある新聞か業界誌やニュース誌に目を通す。その後は決まって、自分の仕事に取りかかる。ブラウン姉妹は、監督が黙々と仕事を続けている間、同じ部屋にいて読書をしたり、縫い物をしたりしている。時折彼女は、夫をちらりと見る。常に心の備えのできた、精力的で、献身的な夫がそこにいるのである。彼女は夫が仕事をしている姿を見ながら、夫には若人に与える多くのものがあると思うのである。

ブラウン姉妹はこう語っている。「若い人々の中には、自分には他人に与えるものが何もないと心配している人がいます。また、気が弱過ぎて、指導的な地位や責任を受け入れない人もいます。私の夫の生涯と信念は、そういう人たちにとって、助けになり、励みにもなることでしょう。

私は、夫が何か新しい責任を受けるたびに、『なぜ私が選ばれたんだろう？その仕事には全く不適任だと思うのに』と言うのを耳にしました。そうして、そういう気持を胸に秘めて、夫はその仕事を始めるのです。熱意と献身をもって、それに求められる限りの主の助けを絶えず求めて始めるのです。

そのようなとき、私は悲喜こもごもの気持で夫の努力を見守ることにしています。夫の努力はある時には受け入れられます。そしてある時には、夫が自分よりも判断力が優れていると考えている人々からしりぞけられます。でも、私は、忍耐と精励とによって最終的にはその仕事が完成することを知っています。いつも計画通りに完成するとは限りませんが、いつも主のみ心にかなった方法で完成します。

ブラウン姉妹はさらに言葉を続ける。「夫の一番好きな聖句かどうかはわかりませんが、夫はだれよりも次にあげるふたつの聖句の教える原則に近い生活をしていると思います。夫は、第1ニーファイ3：7に書かれているニーファイの言葉を絶対的に信じています。『そこで私ニーファイは、私の父に「私は主が命じたもうたことを行って行う。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである」と言った。』夫はまた、教義と聖約82：10にある主の約束が確かなものであることをよく知っています。『汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行なわずば汝ら何ら約束を受けず。』

このふたつの確信は、私たちが子供たちを導く上で大きな力を及ぼし証となっています。同じことが他の若い人々にも言えるものと信じています。」

そして、ブラウン監督は、世界の国々を旅行していない時には、夜を家族の部屋で過ごすのである。緑色のいすに座り、仕事の完成に努めながら。

質疑応答

本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであって、教会の教義を公式に宣言するものではない。

「神はすべての人の祈りを聞いておられるのですか」

解答者　メリル兄弟

神はすべての人の祈りを聞いておられるかという質問に対しては、少なくともふたつの異なった解決法がとれる。そのひとつを、ビルという青年を例にとって説明してみよう。ビルは非常に頭が良いと評判の青年である。ビル自身も、自分の思考力と物事を論理立って説明する能力については自信を持っている。

ビルは現在、様々な国について研究している。ある昼下がり、彼は学校でアジアの諸国についての映画を見ていたとき、この世にどれ程多くの人間が住んでいるか、また国々の生活がいかに多種多様であるかを知り、深い感動を覚えた。

彼は考えながら、神は本当にすべての人の祈りを聞いておられるのだろうか、と自問してみた。しばらく思いにふけっていたが、どうしたら、ひとりの御方が一時にありとあらゆる祈りに耳を傾けることがおできになるのか、どうしても理解できなかった。「全く不可能なことだ。神は天使たちに、自分の代わりに聞く責任を与えておられるに違いない。」ビルはこう推測した。この解答は論理的ではあったが、いささか天父から彼の気持が離れるのを禁じ得ない。

別の解決法を試みた善良な青年をボブとしておこう。ボブの両親は教会員であったが、彼は10代の半ばになるまであまり教会に活発ではなかった。しかしその頃、大きな出来事が彼の周辺に連続して起き、そのために彼の気持が福音の方へ向くことになった。数週間、読書と祈りに没頭したボブは、ついに、キリストとモルモン経の価値について証を得た。ボブは、その証と証に対する忠実さで、人々にも良く知られるようになった。

ある晩、ビルとボブは教会に関するいろいろな問題を話し合った。ビルが言った。「教会についてどうしても納得できないことがひとつあるんだ。それは教会があまりにも盲従を強いることなんだ。」

「どういうことだい」とボブが尋ねた。

「うん、例えば、先日の日曜学校のクラスで、僕たちは祈りについて話し合っていたんだ。そこで僕は、地球上にどれ程の数の人間がいるか説明し、『多分神は全部の祈りを聞くことはおできにならないよ。だからだれか他の者たちにその仕事をさせておられるはずだ』って言ったのさ。するとエドワーズ兄弟は、僕が間違っているのか尋ねると、彼はたくさんの聖句を引用し始めたというわけさ。あんな風に論点をそらしてさ。あれじゃ、全くの盲信だよ。」

「とても興味ある考え方だね。でも、僕はその盲信という考え方には賛成できないな。僕もしばらく前に、同じ疑問について考えたことがあるんだ。まず最初に考えてみたことは、主がそれについて何と言っておられるかということなんだ。教義と聖約を読んでみたし（教義と聖約88:62、63参照）、ジョン・テイラー大管長の偉大な説教も読んでみたよ。

『私たちは、これらのことに関連して、頭髪も皆数えられており、天父の許しがなければ1羽のすずめも地に落ちることはない、と教えられている。そして、この原則に基づいて、イエスもいくらかの教えを述べたことが記されている。イエスは人々に、求めよ、そうすれば与えられるであろうと教えておられる。何ということであろうか。地球上には何億という人間がいるというのに。だが、何億人いようがそれは全く関係ないのである。では神はすべての人の祈りを聞き、答えることがおできになるのであろうか。また、これらのことにすべて関係することがおできになるのであろうか。然り、全くその通りである。』（*Journal of Discourses*「説教集」vol.26　P．31）

僕には聖典と生ける予言者についての証がすでにあったので、次に知りたかったのは、神がどのように祈りを聞き、答えられるかということについてもっと理解するために、一体自分が何をしなければならないかということだったんだ。

それについてずっと祈ってきたのさ。そして、先週の断食日曜日の午後、教義と聖約の88章から、キリストの光と、それがどのようにしてすべてのものの中に存在し、すべてのものを貫き通すのかということについて読んだんだ。もちろん僕は天父がひとりの御方であることを知っている。

しかしこの聖句では、その権威も霊も栄光も影響力も宇宙に充ち満ちていて、ひとりの通路を造り出し、その通路を通じて、あらゆる生ける者に光と生命とが与えられる、と教えられていたんだ。そしてそのことについて考えていたときに、どのようにして天父がその子供たち全員と個人的な接触を保っていけるのか、わかり始めたんだ。そして、神はあらゆる人の祈りを聞かれるという結論に達したのさ。でも答えを受けるためには、戒めに従って生活しなければならないし、神を求めなければならないけれどね。だから僕にはそれが盲信だとは思えないな。」

ボブは、大きな試しを乗り越えたのである。ハロルド・B・リー大管長が啓示について言われたことと完全に一致していた。リー大管長は、私たちはラジオのようなものであると言われた。もし私たちの什分の一という真空管がこわれたり、道徳的に清いという真空管が正しく働いていなかったりすると、私たちが主の送っているメッセージを受けることは決してありえない。それどころか、別の放送局に波調を合わせ、それが悪の側から送られているメッセージであるにもかかわらず、主からのメッセージを受けていると思い込むことさえある。

昔の格言に次のようなものがある。簡単に言うと、人の知恵の尺度はあらゆる答えを知っているかどうかではなく、正しい質問の仕方を知っているかどうかにある、ということである。

正しい質問とは何であろうか。またそれは祈りとどのような関係にあるのだろうか。祈りとは、神と人との交流である。従って私たちが知識と知恵を求めて祈るとき、信仰をもって求めなければならない。

信仰をもって求める者は、断定よりもむしろ理解を求める。ジョセフ・スミスが聖書を勉強していたとき、ヤコブ書1章5節を読んだ。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば与えられるであろう。」ジョセフは次の箇所も読んだ。（私たちはこの部分を忘れがちである。）「ただ、疑わないで、信仰をもって願い求めなさい。」聖句は続いて、疑ってかかる人について次のように言っている。「そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。」

ボブは質問の仕方を知っていたが、ビルは知らなかった。その違いはどこにあるのだろうか。「ただ、疑わないで、信仰をもって願い求めなさい。」ビルはいかにも断定的で、挑戦的な質問をしたのである。それは、彼がこれまで受け入れていたことに対する信頼や信仰に基づいた質問ではなかった。「そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。」

ボブは、断定よりもむしろ理解を求めた。主の言われたことを疑わずに受け入れなさいというリー大管長の勧告に従うためには、信仰と信頼が不可欠である。

求める信仰は、知識と知恵と光明とをもたらす。

私は、神が確かにすべての人の祈りを聞いておられると確信している。神は私たちを愛しておられ、交流することを願っておられる。私たちは正しい質問の仕方を学ぶ必要があり、とりわけ神に関することでは、断定ではなく、理解を求める必要がある。

ロジャー・メリル
教会人事部組織開発・養成マネージャー

「夫婦が神殿離婚をした場合、どうなりますか。また、その子供たちは来世でどうなるのですか」

解答者　カリモア長老

まず最初の質問の「夫婦が神殿離婚した場合、どうなりますか」ということについてであるが、まず神殿離婚というようなものは存在しないということを理解する必要がある。神殿離婚と言われているものは、実際は、神殿での結び固めの取り消しのことである。夫婦が神殿で結婚した場合、ふたりは、市民結婚の法律に関して合法的に結ばれるだけでなく、永遠の絆のもとに、今も永世にも結び固められるのである。

法的な離婚の場合は、法の手続きを踏んで行なわれるが、夫婦の結び固めに関しては、大管長の裁下によってのみこの婚姻関係を取り消すことができる。結び固めの取り消しというのが、言わゆる神殿離婚と呼称されているのである。

神殿で結び固めを受けた後に法律上離婚した場合、その人は、監督から神殿推薦状を発行してもらうためにはあらかじめ、大管長会によってその身が潔白であることを証明してもらう必要がある。離婚が大管長会によって認可されたら、結び固めの取り消しの申請書を大管長宛に提出することができる。通常、結び固めの取り消しを求めるのは女性の方である。女性は同時にふたりの男性に結び固めを望む場合、もうひとりの男性と結び固めを取り消さなければならない。

次の質問の「両親の結び固めが取り消された場合、その

子供たちは来世でどうなるのですか」という点については女性が男性との結び固めを取り消した場合でも、子供たちとその両親との結び固めは取り消されない、と理解すべきである。その子供たちは誓約の下に生まれたからである。これは生得権の祝福である。彼らは、その両親に結び固められたままの状態で留まり、他のいかなる人とも結び固められることはない。その子供たちがだれと絆を保つかという決定については、来世で主が決められるのである。

誓約の子として生まれることについて、「教会指導総合手引き」に、次のように述べられている。「誓約の子は、他のいかなる人にも結び固められることなく、肉親に属する。この規則は、養子縁組、肉親の同意、成人した子供の請求、肉親の死亡などで変えられることはない。」（P・75）

誓約の子として生まれることは生得権の祝福であり、また子供が、両親の行為に関係なく、この生涯で日の光栄の祝福にあずかるにふさわしい生活をした暁には、その生得権も確固たるものとなり、永遠の血統が保証されるのである。このことを心に留めておく必要があろう。この生涯で、福音に従って生活し、この戒めや他のあらゆる戒めを守ったかどうかということが、永遠の生命に至る鍵なのである。

ジェームズ・A・カリモア長老
十二使徒評議員会補助

「両親がすでに什分の一を納めたお金の中から私にお金をくれた場合でも、私はそのお金に対する什分の一を納めなければなりませんか」

解答者　ブラウン監督

教会幹部にこれまで什分の一に関して数多くの質問が寄せられてきたため、大管長会では、ステーキ部長、伝道部長、ワード部監督、支部長宛に、1970年3月19日付で書簡を送った。この書簡の中で、これら教会役員に対して、教義と聖約 119:3、4 に注意を向けるよう勧告が与えられている。次がその聖句である。

「これを以てわが民が為す什分の一の始めとなすべし。かくの如く什分の一を納めたる者は、以後毎年彼らの得る全利益の什分の一を納むべし。これを以て、わが聖なる神権のためにする彼らの守るべき永久的定法となす、と主は言う。」

「だれもこれ以外のことを述べる権限を持っている者はいない。教会員は皆、自分がどれ位主に負債を負っているかを自ら考えて納めるようにする権利を与えられていると私たちは考えている。」しかしながら、大管長会は、聖句に述べられている「利益」は「収入」の意味に解すべきであると指摘した。

毎年、年末に全教会員は監督との什分の一年末面接を受けるよう勧められている。この面接で監督は、什分の一を完納したかどうか会員に尋ねることになっている。

若い人々は、何をもって収入とすべきか、またいくら位什分の一を納めるべきかということについて疑問がある場合、祈りによって解決するか、両親に相談するかすべきである。また監督に助言を求めてもよい。

主は、什分の一と捧げ物を納める人々に、大いなる祝福を約束された。マラキ書3章8節と10節にその聖句がある。

「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもってである。

十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」

什分の一を納めることは、当人と主との間の個人的な問題である。監督は、主の僕として、その献金を受け取り、処理するだけである。

主に対して完全に正直であれば、平安が心に宿るであろうし、紛れもなく、什分の一を完全に納めることであろう。

全利益（すなわち全収入）の什分の一を納めるようにとの主の指示を心に留め、両親と相談し、什分の一と捧げ物を納める人々に約束された祝福のことを考え、その上で自分自身で決めていただきたい。

この戒めならびにその他の主のあらゆる戒めに従って生活するよう努めている限り、主の「みたま」が共にあり、人生の他の決定を下すときも、あなたたちは強められ、導かれることであろう。

ビクター・L・ブラウン監督
管理監督

「年次地区集会」新設さる

第１回目の「年次地区集会」が、数週間後に世界中の各地区で開催される。今までは地区集会が各地区で年２回、また補助組織の年次大会が年に一度、ソルトレーク・シティーで開かれていたが、これが一本化されて「年次地区集会」となり、年に一度、地区単位で開催されることとなった。

この会の企画は大管長会、十二使徒評議員会の指示の下に進められ、承認を得たものである。この会では、神権および補助組織関係の次年度の年間ガイドがすべて提示されることになっている。また、数々の責任分野において訓練を受ける、年に一度の機会でもある。

この地区集会が開催されることにより、世界の各地域には最新の情報が配布され約１カ月のうちに全地区に同じ情報が流されることになる。アルゼンチンのブエノスアイレス、ユタ州の各ステーキ部、香港、スウェーデンのストックホルム、日本の東京、その他どの地区も、この６月に同じ情報をもとに同じ訓練が施される。なお、年間ガイドの具体的な実施は来年度（日本では1977年４月）からとなる。

会は十二使徒会地区代表管理の下に行なわれる。所によっては教会幹部地域担当管理役員が出席する。十二使徒会地区代表は、ソルトレーク・シティーでの４月のセミナーで大管長ならびに他の教会幹部から受けた情報をもとにこの会を進める。

神権指導者は、教会プログラムや教科課程に加え、基本的な神権の責任についても訓練を受ける。たとえば、大祭司グループリーダーおよび補助は、神殿事業と系図に関係した義務について、七十人は伝道に関係した義務について、また長老は長老の活発化という重要な分野について、それぞれ指示と訓練を受けることになっている。

会は普通、７時間から長いところでは９時間にわたって開かれる。内容は、プログラムや教科課程、基本的な責任についての説明はもちろんのこと、昼には特別な文化活動も行なわれることになっている。文化活動では、絵画や工芸の展示、音楽、フォークダンスなどの催し物が行なわれる。このため、昼食の時間はかなり長くとってある。今回から行なわれるこの新しい地区集会には、以前と異なり、ステーキ部内のすべての神権および補助組織会長会が参加し、さらに招待があれば地方部（伝道部内）内の同じ役職を持つ人々も出席する。各ステーキ部からの出席者は以下の通りである。ステーキ部長会、高等評議員、ステーキ部幹部書記、ステーキ部長記；メルケゼデク神権定員会会長会、グループリーダー（補助）監督会、ワード部幹部書記、ワード部書記；ステーキ部ヤングアダルトおよびスペシャルインタレスト評議会代表（男女）；ステーキ部スポーツディレクター；ステーキ部扶助協会会長会と書記；ステーキ部初等協会会長会と書記；ステーキ部日曜学校会長会、子供日曜学校主任、書記；ステーキ部若い女性ディレクター、アドバイザー、書記。

指導者はよく準備してこの会に集うべきである。そうすることによりさらに成長し、教会員各人に手を差し伸べ、教え、証を植えつけることができる。

おくびょうチンカイ

おはなし：バーナディン・ビーティ

チンカイの村は、タイワンの村の中にある。山はけわしく、谷川はうずまきながらしぶきをあげてながれている。

チンカイは、あらしがこわかった。夜も犬もきらいだった。高いところもいやだった。つりばしをわたるときは　てすりにつかまりながら、下を見ないようにして　そろそろわたった。

ある日、友だちのチンギョウが　さかなつりにさそいに来た。お父さんもお母さんもるすだった。

「行こうよ。」　おにいちゃんのエンショウがいった。

「行ってもいいけど……」

チンカイは空を見上げた。黒い雲がひとかたまり　うかんでいた。おじいちゃんの

むかし話が　チンカイのあたまをかすめた。こうずいがおしよせて、村をおしながしてしまったという話だ。

「早く来いよ。行っちゃうぞ。」

「やーい、こわがり。雨なんかふるものか。おまえは、いつもこうなんだから。」

「ほんとに、おくびょうだな。」

いつもなら、みかたになってくれた　おにいちゃんまでが　きょうはちがう。チンカイは下をむいて、まっ赤になっていた。

「ぼくは、おくびょうなんだ。」

しばらくたった。あたり一めん、きりがかかり　ぽつり、ぽつりと雨がふりだした。そうするうちに　滝のような大雨になり、谷川の水が　ごうごうと音をたててながれるのが聞こえてきた。チンカイはひとりで家の中でふるえあがっていた。

しかし、エンショウやチンギョウはどうしたのだろう。なぜ帰って来ないのだろう。チンカイは、しんぱいになって　外へ出た。足が、がくがくふるえた。おにいちゃんはぶじだろうか。水におしながされてしまったのではないだろうか。こうしてはいられない。チンカイはやっとのことで　一足一足　歩いていた。

「エンショーウ、チンギョーウ。」　何どよんでも　へんじはなかった。

谷川はまるで、大きなヘビのように　うねりながら、ものすごい早さでながれている。

「エンショーウ、エンショーウ、おにいちゃーーん。」　チンカイはさけんだ。きしにそって歩きながら、つりばしのところまで来た。そのときだ。「チンカーイ」という声がした。切れたつりばしのはじの方に水にもてあそばれながらひっしにしがみついているエンショウとチンギョウの姿が見える。チンカイは、口もきけずに　やっとのことで、つりばしのロープをつかんでひっぱった。

ひっしだった。あと……もう……ちょっと……。チンカイとエンショウの手と手がしっかりと組み合わされた。そして、ぐいっ、と力が入った。エンショウがさきに上がった。それから、チンギョウが上がった。

「こいつ、ゆうきあるよ。」　チンギョウが　顔をゆがめながら、わらいをうかべていった。

「だめだよ、ぼく。まだ、こんなに足がふるえているもの。」　よほどこわかったらしく、チンカイのくちびるは　むらさき色になっていた。

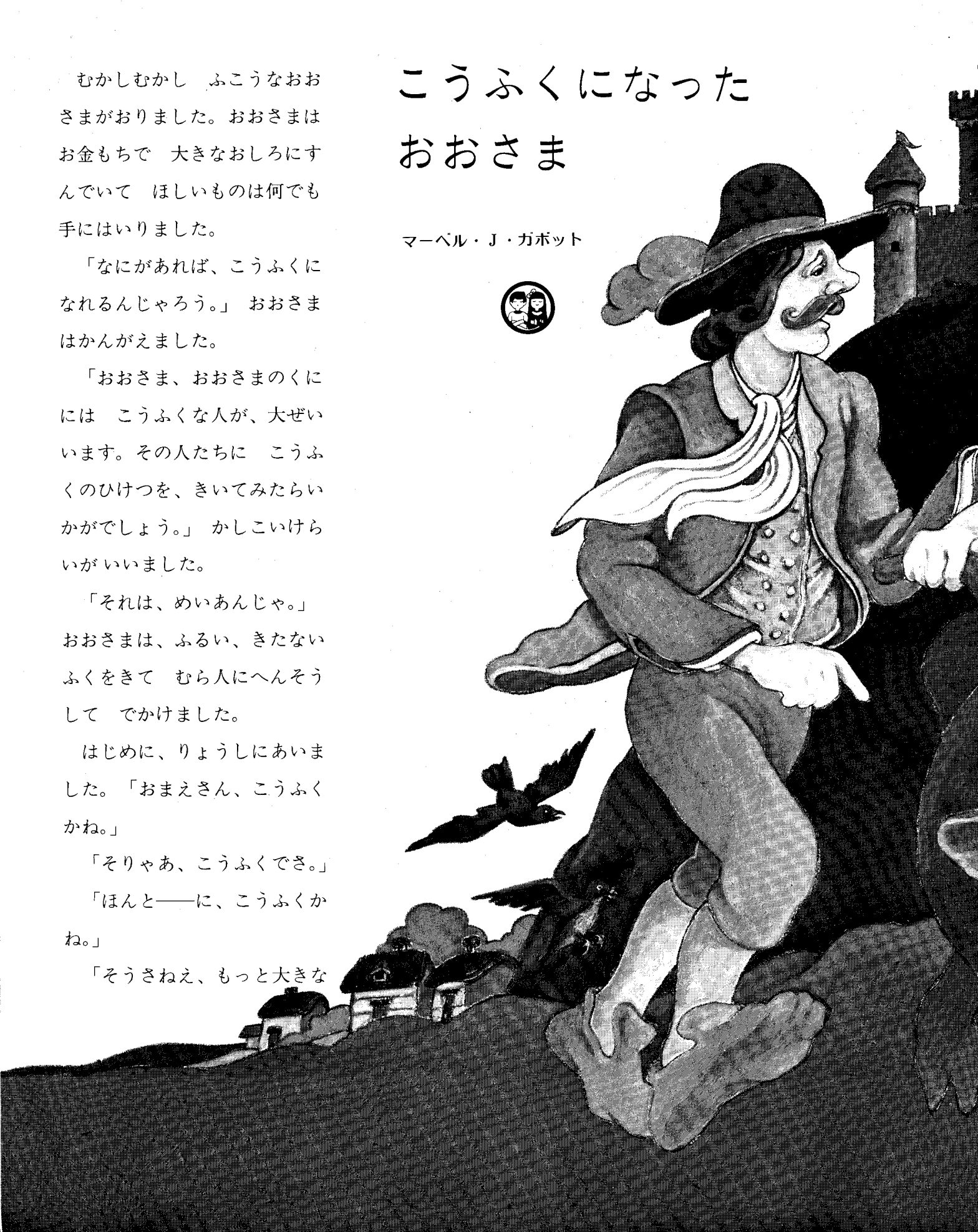
「だれだって、こわいさ。そのこわいのをのりこえたのが　ゆうきのあるしょうこさ。」　エンショウがいった。

「そうさ。」　チンギョウもいった。なんだか、てれくさそうだった。

チンカイも　おずおずと、うれしそうなえがおになった。

こうふくになった おおさま

マーベル・J・ガボット



むかしむかし　ふこうなおおさまがおりました。おおさまはお金もちで　大きなおしろにすんでいて　ほしいものは何でも手にはいりました。

「なにがあれば、こうふくになれるんじゃろう。」おおさまはかんがえました。

「おおさま、おおさまのくにには　こうふくな人が、大ぜいいます。その人たちに　こうふくのひけつを、きいてみたらいかがでしょう。」かしこいけらいがいいました。

「それは、めいあんじゃ。」おおさまは、ふるい、きたないふくをきて　むら人にへんそうして　でかけました。

はじめに、りょうしにあいました。「おまえさん、こうふくかね。」

「そりゃあ、こうふくでさ。」

「ほんと――に、こうふくかね。」

「そうさねえ、もっと大きな

ふねがあったらねえ。」

「こいつはだめだ。こうふくじゃない。」

つぎは、きこりにあいました。

「おまえは、こうふくかね。」

「ああ、こうふくですよ。」

「ほんと――に、こうふくかね。」

「うーん、もっとよくきれるのこぎりがあったら、こうふくだなあ。」

「こいつもだめだ。」

そのつぎに、おひゃくしょうにあいました。大きなうしにまたがって　たのしそうに　はたけをたがやしていました。

「おーい、おまえさんは、こうふくかねーえ。」

「ああ、こうふくじゃーあ。」

「ほーんーと――に、こうふくかね。もっと、うしがいたらいいと、おもわないかね。」

「いいや、こいつがいりゃあたくさんじゃわい。くうきはうまいし、小川も森もうつくしいし、お日さまの下ではたらける。ありがたいことじゃ。わしゃあほんと――に、こうふくじゃ。」

「この人は、ほんとうにこうふくなんだ。」　おおさまはおもいました。そして　いいました。

「わしにも、はたらかせてくだされ。」

おおさまは、くわをとって、はたけを、たがやしはじめました。おひゃくしょうといっしょに、いっしょうけんめいはたらいて、小川や森がうつくしいことや、お日さまがあたたかいことをはなしました。

おおさまがもっていなかったたったひとつのもの、それは、かんしゃの心でした。おおさまは、いま　ほんとうに　こうふくでした。

まっすぐでせまい道

ちいさなおともだちへ

十二しとひょうぎいん会会いん
マービン・J・アシュトン

わたしの友だちに、ライオンがりをしている人がいました。ひつじやブタをおそうわるいライオンをうつのです。ある日、その人の家に行くと、りょう犬が　にわにつないでありました。

「きょう、こいつをうるんだ。」

「なぜだい。」

「ちっともいうことをきかないんだ。いくらおしえても、ライオンをおいかけないで、ウサギやシカばかりおいかけるんだよ。

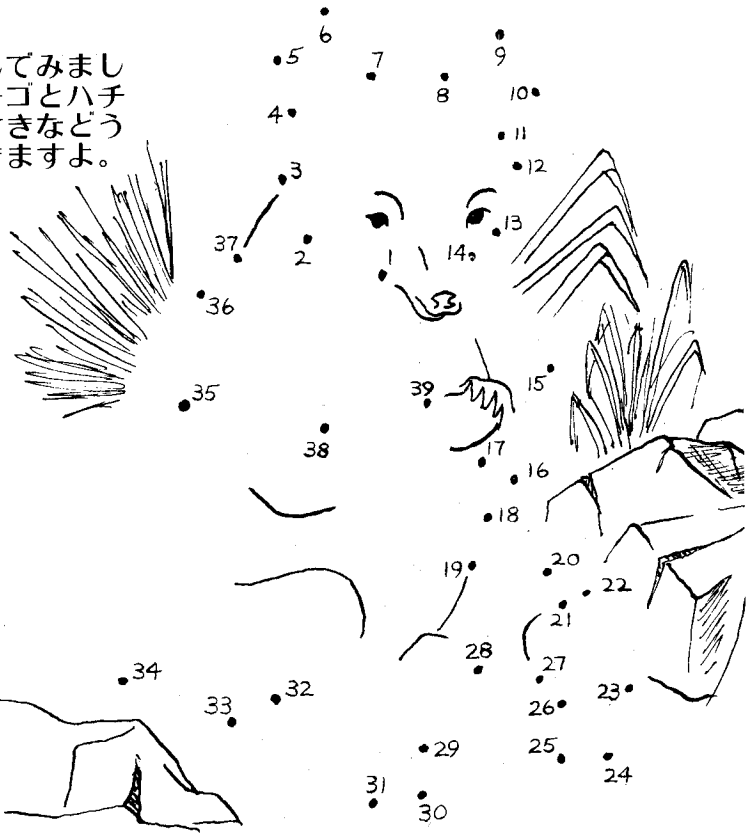
いい犬なんだが、ライオンがりには　やくに立たないんだ。」

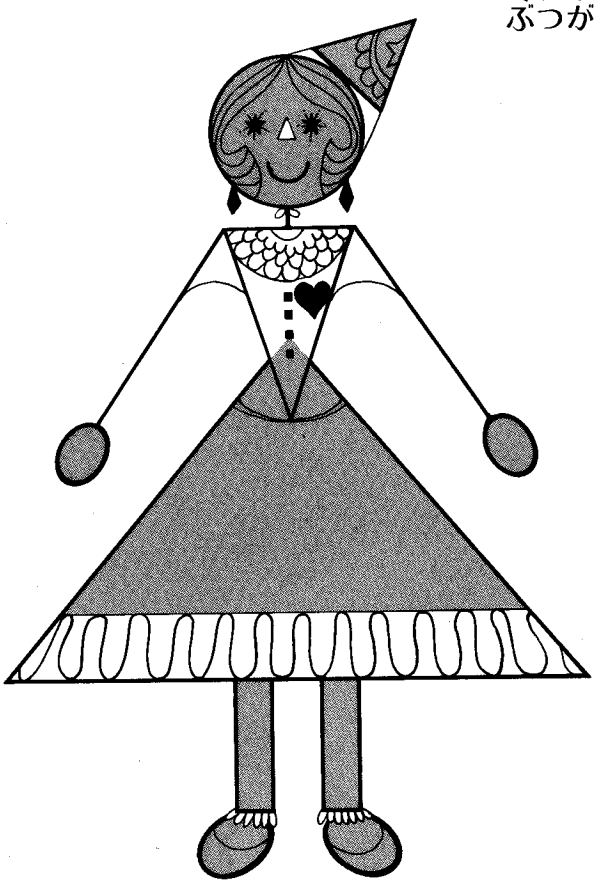
わたしは、その犬がかわいそうになりました。でも、主人のいうことをきかなかったのですから　しかたがありません。

さて、みなさんはどうでしょうか。わたしは小さかったころ　あそぶのはおもしろいけれど、きょう会はつまらないな、と思ったことがありました。でも、いつも　お父さんや　お母さんや　先生たちが、天のお父さまのところへ行く、まっすぐでせまい道のことを　おしえてくれました。天のお父さまによろこばれる人になるためにはときには、したくないこともしなければなりませんね。森に行ってごらんなさい。リスは、冬のために　たべものをあつめています。小とりだって、たまごを生む「す」をつくっていますよ。

おもちゃばこ

てんをむすんでみましょう。ノイチゴとハチミツがだいすきなどうぶつが、できますよ。





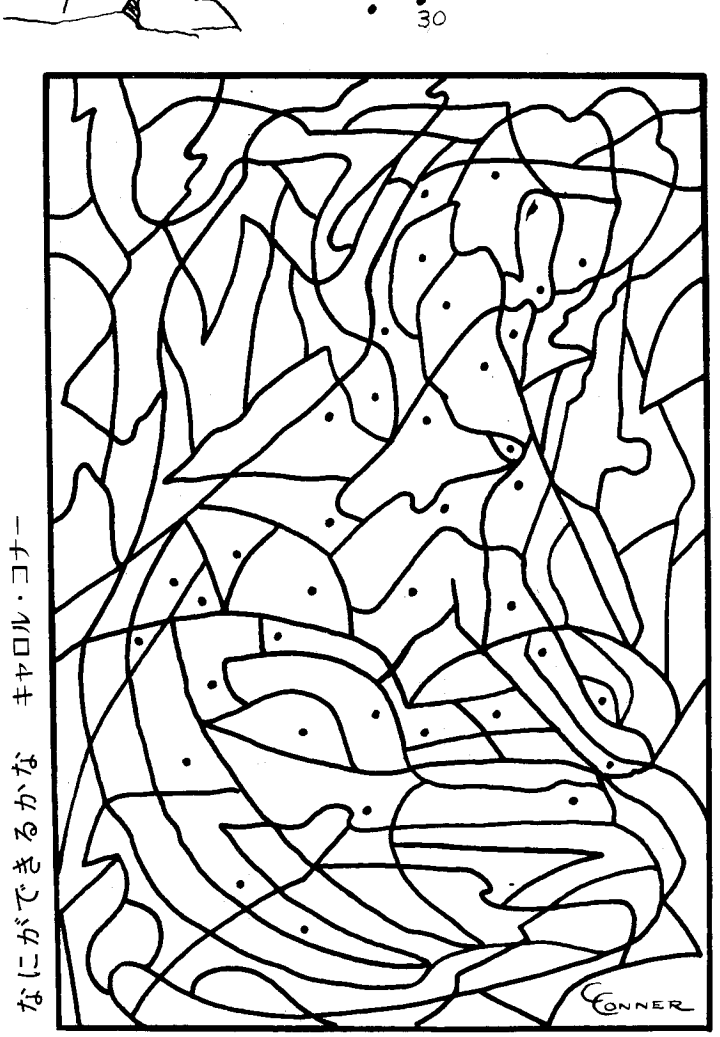
スージーちゃん

グレアム・デザー

スージーちゃんのからだは、いろいろなかたちで、できています。

かおはなんですか。● まるですね。くちはなんですか。みかづきのようなかたちですね。そう、みかづきがたです。ぼうしとブラウスとスカートは？ はい、▲ さんかくです。はなも、さんかくですね。それからめをみてごらんなさい。たのしそうに、キラキラかがやいていますね。おほしさまのようですね。そうです。★★ ほしがたです。

スージーちゃんのむねに、ドキ、ドキ、ドキ、となっているものがあります。そう、しんぞうですね。しんぞうは？ はい、♥ ハートがたです。くびとうでは、なんですか。—— せんですね。あしは？ ▬ ながしかくです。ては？ ● たまごがたです。くつもおなじですね。それからボタンは、■ ましかく、イヤリングは、◆ ひしがたです。



なにができるかな　キャロル・コナー

てんのあるところを、ぬりつぶしてみましょう。

1975年10月4日（土）145回半期総大会福祉部会における説教

福祉活動に占める扶助協会の役割

扶助協会中央管理会会長
バーバラ・B・スミス

扶助協会に活発に参加する姉妹は、家庭における備えの原則や方法を学ぶことができる。

愛する兄弟姉妹の皆様、地上の主の子供たちのために、今管理監督会が提示した素晴しい福祉活動の構想を、私は本当に感謝しています。私たちは、社会の基盤である家庭の重要さを認識しています。家族の中に神権者である父親がいますが、父親は家族を治める頭であり、管理の責任者です。父親が家族で行なう活動のおおよそを決め、それをみんな一緒に協力して発展させ、みんなの祝福となるように計画するのです。

私はこの会で、全教会員の半数を占める女性を代表できることを、うれしく思います。私は神権者の手になるこの計画が知恵にあふれたものであることをもう一度はっきり申し上げ、教会の女性たちはこれからもこの素晴しい福祉活動を支持し、この活動のために努力を重ねてゆくことをお約束致します。

扶助協会は福祉活動に大変重要な役割を担っています。予言者を通じて与えられた主の命令によって、扶助協会は福祉活動の計画、実行を補佐する務めを受けてきました。私たちの福祉という管理の職を立派に果たすために、扶助協会は教会のすべてのレベルで神権者と共に働きます。扶助協会中央管理会は管理監督会と共に、またそのように召された地域ではステーキ部扶助協会会長が地域の神権福祉活動指導者と共に、またステーキ部扶助協会会長会はステーキ部長会と、ワード部扶助協会会長会はワード部監督会と共に働くのです。

1946年に開かれた扶助協会大会で、当時十二使徒であったハロルド・B・リー長老が初期の頃のある調査について、話をなさいました。助けが必要な人々の間に福祉活動の計画が始まったばかりの頃のことです。調査の対象になった各家庭では、父親の大半があまり手に職を持たない人たちでした。そして母親たちは、ホームメーキングや家庭管理の技術をあまり使っていなかったので、家にあるものを上手に利用することができませんでした。それに自立するためのいろいろな技術を身につけている人はめったにいませんでした。（*Relief Society Magazine*「扶助協会誌」1946年12月号、P.809－817 を参照）

福祉活動計画の一分野として「家族に備えをさせる」という活動を成功させるには、緊急時に独立独行できるという安心感を自分も家族も確保できるように、女性たちが勤勉、倹約、独立、労働、分別の特質を伸ばすことです。教会の全家族が「備えをするように」というチャレンジに応えられるよう、扶助協会は姉妹たちのために次のことに力を入れています。

教育のプログラムを通じて、どのレッスンでも福祉に関連した課題を、新規にあるいは継続して勉強します。たとえば金銭について、家庭について、時間の管理について、家庭看護についてなど。女性が知識や技術を身につけるように手伝うことで、たくさんの問題が防止され、解決されます。

また、扶助協会役員が「福祉活動の手引き」で言われている責任を効果的に果たすにはどうすればよいかについて、ステーキ部やワード部の扶助協会会長会を指導する計画があります。

さらに、家庭訪問教師が訪問先の家庭の必要をもっと敏感につかみ、扶助協会会長を通じて監督に福祉活動を依頼した方が良いような場合には、すぐ気づいて手を打つことができるように、入念な指導を行ないます。

地区集会では、扶助協会の部で福祉活動に多くの時間をさきます。また扶助協会会員には、福祉活動への参加を奨励します。

最近私のもとにひとつの報告がありましたが、それによると、教会の中で扶助協会と神権者が協力して地上の主の息子、娘たちのために働いていることがよくわかります。

ある冬の寒い日、ふたりの家庭訪問教師がワード部に引越してきたばかりの家庭を訪問しました。ノックをしてもしばらく返事がありませんでしたが、もう一度と思って、2度、3度とノックしてみました。

するとやっと、ドアがほんの少しだけ開いて、女性と子供がひとりパジャマを着てコートにくるまっているのが見えました。訪問教師は、凍るように、

寒い家の中にしぶしぶ通されました。

訪問教師はその女性にいろいろと尋ねました。彼女は、思いやりと理解ある態度に心を和らげ、涙ながらに家族の状態を打ち明けてくれました。

まだ学生である夫が重病で、病院の集中管理病棟に入院中なのでした。それまで何年もかかって今後の勉学のために夫婦で貯えていたお金は、全部医療費につぎ込まれました。

燃料の予備もすっかり使い果たしたので、若い妻と子供はベッドにもぐり込み、母親は月の残りを1リットルのミルクと半分のパンでしのごうとしていたのです。

訪問教師が援助を申し出ると、姉妹は、「夫にはプライドがありますから、お恵みを受けるのは喜ばないでしょう」と言いました。

家庭訪問教師たちは、主の福祉計画は人の自尊心や自立心を奪うものではなく、むしろそれを育てるものだと上手に説明しました。やさしく愛をもって勧めたおかげで、その若い妻はやっと扶助協会会長に電話するのを承諾してくれました。

やがてすぐに扶助協会会長と監督がその家に着きました。すぐに燃料が届けられ、炉に火が入り、温かい食べ物が用意され、食料品のリストが作られました。それから監督が入院中の夫を見舞い、留守中の家族の世話は心配ないと励ましました。神権の祝福も施され、若い夫は初めて心の安らぎを得ました。そのときから、彼は回復し始めました。個人の福祉の責任を持つ扶助協会の教育担当副会長が、彼の妻に、限られたお金のやりくりについて提案をし、受けた物質に相当する労働の相談に乗りました。

私たちは教会という大家族の中の女性として、「貧しい人、困っている人に手を差し伸べ」、「家庭の状態を改善する」ように教えられています。そのような努力を通じて、援助する人もされる人も成長するからです。組織としての扶助協会は、ワード部や各家庭が行なう備えについて、いろいろお手伝いができると思います。私たちは皆さんと共に努力してまいりたいと思います。

私たちは心と精神と思いと力のすべてを尽くしてこの大きな業に携わるときに、必ずや喜びが得られることを証いたします。イエス・キリストのみ名によって申し上げました。アーメン。

知恵の泉

末日聖徒はだれでも豊かな識見、知恵を持っており、それらは問題に対する解答や個人的な導きを捜し求めること、福音の原則を学び応用すること、経験の積み重ねなどから得られるものです。それを他の教会員と分かち合いましょう。下記の宛先まで原稿をお送り下さい。〒106 東京都港区南麻布5－10－25 中正堂会館　末日聖徒イエス・キリスト教会翻訳事業部 八木沼修一

平和の贈物

「私たちは自らを与えることのできる状態に整えて初めて互いに捧げ合うことができる。罪のかせに縛られた夫は自らを妻に捧げることはできない。彼には与え得る自分というものがないからである。また、憎しみの奴隷になっている妻は、自らを夫に捧げることができない。さらに正義や心の平和を身につけていない親は、それを子供に教えることはできないのである。

心の平和を得る最良の方法は、「平和の君」に従うことである。善良なキリスト教徒が完全な者となるためには良心を汚れないものとしなければならない。神の教えを秩序立ててよく理解し、それに自らを正しく専念させることによって私たちは肉体的快楽をはるかに超越した平和と安らぎを心の奥底に湧き立たせることができる。平和と善意は、この世の喜びの中で最も快いもののひとつである。幸いにも、平和は貧者、富者を問わず容易に与えられる。社会から見捨てられた人も社会の指導者と同様自由に平和を手にすることができる。また、謙遜な市民も国家の最高権力者と同等の平和を得ることができるのである。

スターリング・W・シル
（「クリスマス講和」*Deseret Book Company*, 1973 pp. 57、26.）

親しく相まみえ

「つい先頃まで、私たちは私たちの長兄と天父のお二方についてよく知っていた。私たちは地上の生活に入る時が近づいていることを知り、その生活を通じて御二方と同じ完き喜びが得られることを知って喜んだ。私たちはもう待ち切れずに天父と私たちの兄弟、主に、私たちがどんなに御二方を愛しているか、またこの世でのサタンの妨害を物ともせずどのようにして従順になろうとしているかを証明した。

今、私たちはこの地上に生を受けている。記憶はベールをかぶったまま。自分に何ができるか神と自らに証明している。従って、私たちが幕を通り抜けたときも、私たちが天父をどんなによく知り、そのみ顔がどんなによく見慣れたみ顔であるかに気づくだけで、私たちを驚かせるものは何もない。また、ブリガム・ヤング大管長が語っているように、私たちはこの地上でなぜあのように愚かなことをしてしまったのかと不思議に思うだろう。

神は私たちを愛しておられる。また私たちを見守り、私たちの成功を望んでおられる。そして、神が私たち一人一人の永遠の幸福のためになされなかったことはただの一つもないことをいつの日か、知るであろう。もしそのことがわかってさえいれば、私たちを助けようとしている天の軍勢がいることもわかるに違いない。今私たちに彼らを思い出すことはできないが、天の友は私たちの勝利を切望しているのである。今日は私たちに何ができるかを示す日である。毎日、毎時間、一瞬一瞬、私たちはどのような生活、どのような犠牲を神に示すことができるだろうか。もし私たちが自己のすべてを捧げるなら、至高者からすべてのものを受けることができるであろう。」（十二使徒評議員会会長　エズラ・タフト・ベンソン，ＢＹＵ週例集会での説教 1974年12月10日）

人物さがし

ジョン・A・トウベッドネス

下の各文は聖書とモルモン経に登場する人について述べたものです。ふさわしい人物をモルモン経と聖書から１名ずつ捜し出して空所に記入して下さい。あなたはモルモン経と聖書のどちらに強いでしょう。

1. _____ 教会を迫害していたとき、天からの訪れを受けた。

2. _____ まだ若いときに、軍隊の長となった。

3. _____ 自分の住んでいる地の崩壊から逃れるため、船を造り、別の大陸へ渡った。

4. _____ 約束の地を求めて、自分の地を去った。

5. _____ 死ぬ前に息子たちを祝福し、将来彼らとその子孫に起こることを告げた。

6. _____ 信仰、希望、愛について述べた。

7. _____ エルサレムがバビロニア帝国（カルデヤ人）に滅ぼされることを先見した。

8. _____ 福音を宣べ伝え、教会の秩序を正すために、市から市へ旅をした。

9. _____ 庭（園）で神に祈りを捧げた。

10. _____ 一騎打ちで敵の首をはねた。

11. _____ 王の命令によって、火あぶりにされた。

12. _____ 王族ではないが、王になって欲しいと言われた。しかしそれを辞退した。

13. _____ 故郷に戻り、捕われの身であった民を導き出した。

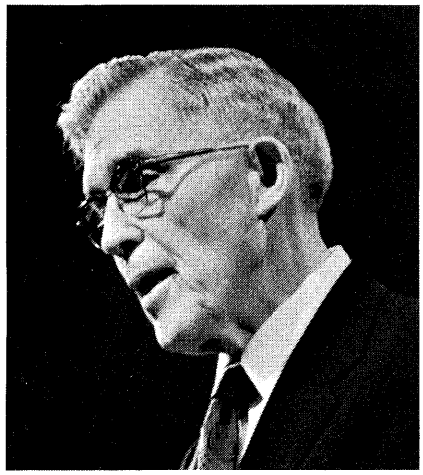
14. _____ 自分の軍をことごとく破滅へと導いた。

正解

聖書	モルモン経
1．サウロ（パウロ）（使徒9:1-6）	息子アルマとモーサヤの息子たち（モーサヤ27:8-19）
2．ダビデ（サムエル上18:5）	モルモン（モルモン2:1,2）
3．ノア（創世7-8章）	リーハイ、ニーファイ（Ⅰニーファイ1:18;17-18章）
4．アブラハム（創世12:1-5）	リーハイ（Ⅱニーファイ2:4;18:8）
5．ヤコブ（イスラエル）（創世49章）	リーハイ（Ⅱニーファイ1-4章）
6．パウロ（Ⅰコリント13章）	モルモン（モロナイ7章）
7．イザヤ、エレミヤ（イザヤ39:5-7）	リーハイ、多くの予言者（Ⅰニーファイ1:4,13）
8．パウロ（使徒13-38章彼の書簡を参照）	息子アルマ（アルマ5-16,29-35章）
9．イエス（マタイ26:36 ヨハネ18:1,2）	ニーファイ（ヒラマン7:10,11）
10．ダビデ（サムエル上17:40-57）	コリアントメル（イサヤ15:29-31）
11．シャデラク、メシャク、アベデネゴ（ダニエル3:8-30）	アビナダイ（モーサヤ17章）
12．ギデオン（エルルバアル）（士師8:22,23）	ベアルベ（モーサヤ23:6-14）
13．モーセ（出エジプト3－14章）	アンモン（モーサヤ7-8,22章）
14．パウロ（出エジプト14:23-28）	シズ、コリアントメル（イサヤル14-15章）

「七十人」その歴史

七十人最高評議員会会員
S・デルワース・ヤング



1975年10月3日金曜日、ソルトレーク・シティーのタバナクルにおいて、私たちは、第145回半期総大会の開会を告げるスペンサー・W・キンボール大管長の声を聞いた。

その朝の模様は世界各地に放送され、大勢の人々が大管長の劇的な発表を聞いたのであった。またその発表は深夜にも再び放送された。

「本日私たちは、4名の新しい教会幹部の召しを発表します。彼らは主のみ業の中で特に伝道の業に携わることになります。

ジーン・R・クック長老は、七十人最高評議員会会員になる予定です。また、七十人第一定員会が組織される予定です。この定員会には将来70名の会員が召され、7名から成る会長会が管理することになります。

本日、3名の兄弟が七十人第一定員会に召されることになっています。……チャールズ・A・ディディア兄弟、……ウイリアム・ロウセル・ブラッドフォード兄弟、…… ジョージ・パトリック・リー兄弟の3名です。

この定員会には、総計70名になるまで今後も会員が召されることになっている。この3名の新しい定員会会員は、各地から召された七十人であって、教会幹部となる。

最初の七十人第一定員会が組織されたのは、今から140年も前のことである。この定員会が初めて組織された当時も、やはり同様に劇的であり、異例のことであった。

1835年2月7日のことである。予言者ジョセフ・スミスは、通常の教会の集会を終え、自宅へ向かった。ジョセフ・ヤングとブリガム・ヤングも一緒であった。ふたりは、予言者の家に招かれて、歌を歌うことになっていた。ヤング家のこの兄弟の歌は非常に素晴らしく、この兄弟のデュエットは、予言者のお気に入りだった。

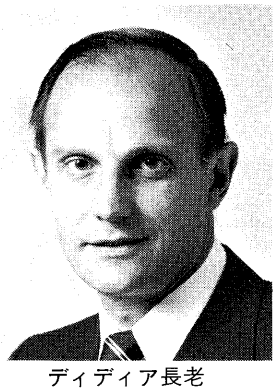
この日、予言者はブリガム・ヤングに、次の日曜日すなわち2月14日に集会を召集することを伝えた。また十二使徒会を組織するつもりであることも話した。それから予言者はしばらくの間十二使徒会の組織について説明した後、ブリガムに、彼も十二使徒のひとりに召される予定であると告げた。それからジョセフ・ヤングの方を向くと、「あなたは七十人の会長になります」と言った。

救い主が「別に七十人」をつかわされて以来、「七十人」という言葉の意味が説明されたのは、この時が初めてのことである。

予言者はさらに、この十二使徒と七十人は、シオンの陣営の忠実な会員の中から選ばれることになっていると言った。これらの人々は、主のみ前にその捧げ物が受け入れられた人々であった。必要とあらば、シオンの地の贖いのために、その生命をも捧げた人々であった。

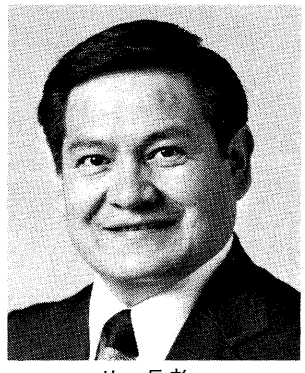
その年の春に開かれた一連の集会において、七十人定員会が組織された。しかし、定員会の組織や、その組織を管理する神権の権能の点で誤解が生じた。ここで問題を起こした人々は、他のキリスト教団体から改宗して来たばかりの人々である。

大祭司たちと、定員会の会長に召された七十人たちの間で、神権の権能について一大論争が起こった。こうした論争の結果、予言者は七十人定員会の会長会から6名の会長を解任し、彼らをかつて所属していた大祭司定員会に戻した。そしてジョセフ・ヤングだけがその評議員会に残留し、彼は先任会長となって、次に召された6名と共に働いた。ジョン・グールド、ジェーム



ディディア長老

ブラッドフォード長老



リー長老

ズ・フォスター、ダニエル・S・マイルズ、ジョサイア・バターフィールド、サモン・ジー、ジョン・ゲイロードの6名である。

ジョセフ・スミスは存命中に、七十人定員会を3つ半組織した。第2、第3、および第4定員会の半分は共に会長なしで組織された。第一定員会の会長たちが、第一定員会もその他の定員会も同様に管理したのである。

1845年、予言者ジョセフ・スミスの死後、十二使徒定員会は七十人を再組織した。全部で10の定員会が組織され、35歳以下の長老たちの中からその会員が召された。また各々の定員会の会長は、第一定員会の63名の会員の中から選ばれた。

この結果、最初の7名の会長は第一定員会と他のすべての七十人を管理することになり、第一定員会にいた63名の会員は、9つの定員会に分割されたのであった。また、第一定員会の会合が必要な時は、この9つの定員会の会長たちが集まって第一定員会を再構成することが了解された。

この後、聖徒たちは西部へ移動した。これら10の定員会の会員たちも、それぞれ定住地を求めて新天地へ散って行った。そのためにどの定員会も、会員を集めて集会を開くことが不可能となった。当時は、ひとつの定員会から他の定員会へ会員の籍を移せなかったからである。

1883年にジョン・テイラー大管長は、全部の定員会を組織し直した。テイラー大管長は、ステーキ部にそれぞれ定員会を設け、自分の居住するステーキ部の定員会に所属するよう七十人全員に指示を出した。

さらにテイラー大管長は、第一定員会の会合を開く必要が生じた場合、最初に組織された63の定員会の先任会長が集まって第一定員会を構成することを指示した。しかし、テイラー大管長の時代も、その後も、この取り決めが実際に発効したことは一度もなかった。

時代が進んでも、第一定員会は特に必要とはされなかった。定員会を構成するきっかけとなった1835年の啓示には、次のように書かれている。

「また、福音を説き異邦人と全世界の人々に対する特別の証人たらんがため『七十人』召さる。すなわちかくの如くこの者たちの天職に就ける義務は、教会に於ける他の職員らの義務と異るなり。

またこの『七十人』は、今挙げたる十二人の特別なる証人、すなわち十二使徒と等しき権能を有する定員会を構成す。」（教義と聖約107：25、26）

当時、教会組織は極めて小さかったため、十二使徒会を援助する必要がなかった。また定員会に所属していなくても伝道に召される人もあった。伝道部を組織し、改宗者を得ることが、その第一の目的だったのである。

十二使徒を助ける必要が特別なかったため、何年にもわたって第一定員会は組織されずにいた。1930年代まで、ステーキ部の四半期大会には教会幹部をふたりずつ派遣することが慣例であったことから考えても、このことはうなづけるであろう。大管長会や十二使徒会の会員が、補助組織の会長を務めたこともあった。

しかしここ30年間の教会の発展は驚異的なものである。ステーキ部と伝道部の会員数が激増したため、明らかにもっと多くの教会幹部が必要となった。ステーキ部の指導監督を助けるため、十二使徒補助が召されている。これらの重要な役職にある人々は、伝道部においてもその指導監督を助けている。伝道部もやはり増加してきたためである。

大管長会や十二使徒評議会がどのような助けを必要としているかという点に関して、大管長会からはっきりと定義してもらう必要があった。

現在、多大の努力を払って、み業を押し進める時が来たことは確かである。

1975年の春に、30以上の伝道部が増設された。そして宣教師に召された人の数も飛躍的に増加した。今日、伝道部の数は133を数え、宣教師の総数は21,000名以上にも及ぶ。（この中には、数万人のステーキ部宣教師は含まれていない。）近い将来、伝道部においても宣教師においても、さらに劇的な隆盛が見込まれている。

スペンサー・W・キンボール大管長は、私たちがどのように努力しなければならないかを指摘した。私たちは、「歩みを早め」、努力を重ねなければならない。他の人々に警告しなければならない。それを受け入れてもらうには、まずそのメッセージを伝えなければならないのである。

若人たちは、清い生活を送り、伝道に出ることを、教会活動の一環と考えるよう教えられている。伝道と大学ではどちらの益が大きいかなどとは考えない。伝道に出て、その後大学へ行くことが望ましいのである。

どの時代にあっても、大管長は皆、自分の責任について深く考え、教会の組織機構に手を加えてきた。霊感を受けて、なすべきことを最善の方法で成し遂げることができるよう、組織を変えてきたのである。これは、現代の啓示という考え方と完全に調和している。

簡潔に言うと、現代の啓示とは、生ける予言者に現在与えられる啓示である。予言者は、旧来の組織に拘束されることはない。旧来の組織は、1830年、1840年、1870年、あるいは1950年当時の教会に合っていたに過ぎないのである。

万一、生ける予言者が、世界や教会の変化に即応できないとすれば私たちは古代イスラエル人のように束縛された状態になることであろう。古代イスラエル人は、モーセの制定した規則からそれることはできないと信じていたのである。その結果彼らは、1,000年後の生活には全く不つりあいな社会条件の中で生活することになったのである。

大管長会と十二使徒会は、今日の必要を満たすため、七十人を治める啓示に添った七十人第一定員会を組織した。

必要に応じて、定員会はその会員数を、啓示通りの総計70名になるまで増していくことだろう。そして、さらに必要とあらば、予言者が断を下して、み業を果たすに必要な第二、第三の定員会が組織されることだろう。そして、教会は予言を成就し、神の王国は全地に満ちるのである。

母親のように

アーデス・G・カップ

「ステーキ部長に言われて来たのです。あなたもお子さんがおられないので、私の問題をわかって下さるでしょうとのことでした。」家の玄関に立って話す彼女の口調から残念でたまらない気持がよくわかりました。そのとき私たちは一面識もありませんでしたが、悩む心の表に現われた嘆きは、それと知ることができました。それからの数時間彼女は心の思いを私に打ち明けて下さいました。子供を持つという祝福が与えられないことを話す彼女の目からは涙があふれていました。

来たときは見ず知らずの人でしたが、心を割って自分の問題を話し合ううちに私たちは実の姉妹のようになりました。私は、ステーキ部長が霊感を受けてその心やさしい若婦人を私のところへ紹介して下さったことを感謝しました。彼女は帰るときに、振り返って私を見つめました。一瞬沈黙があってから、彼女はうれしそうに言いました。「ステーキ部長は正しかったですわ。あなたは私の気持をわかって下さいました。どうもありがとうございます。」

私は人の重荷を軽くしてあげられて幸せでした。彼女の問題を理解できたのですから。玄関を出て、角を曲がって消えていく彼女の姿を見つめながら、私はいつか聞いた十二使徒補助のニール・A・マックスウェル長老の言葉を思い出しました。

「私たちはこの狭い海路を無事に航海しているが、私たちのまわりには、遭難しかけている船やすでに遭難してしまった船がある。しかしその船も私たちの船の灯で自分の道を見つけることができる。」（ブリガム・ヤング大学で行なわれたファイアサイドでの説教より）

実を言えば、私は自分の人生に暗黒の霧がたちこめたときに、いつもこのような理解が、つまりその灯が得られたわけではありません。でも、そのような霧も私たちの人生には必要なのです。「動揺や困難、誘惑、不安といった状態はある。しかし、それが人生を意義深いものとする一要素であることは事実である。そのような状態にあってこそ本当の霊的成長への道を探求し、希求し、目的に到達し得るからである。」（ブルース・C・ヘイフン、ブリガム・ヤング大学准教授）それは私たちに可能なことです。でも私はこれまでに何回も、できるのかしらと本当に疑いました。

私の動揺する心がよくわかるのは、数年前の日曜の朝の出来事です。日曜学校は楽しいものですが、母の日だけは違いました。私は母親でないので、悲しい気持でした。でもその年は、きっと違うと自分に言い聞かせたのです。

集会の間に、母親は全員立つように言われ、花をひとつずつプレゼントされました。オルガンが低く流れて、少女たちが通路を前から後ろへ1列ずつ小さなベゴニアの鉢植えを、まだ立っている母親たちにあげながら静かに歩いてきました。私は今年こそ、きっと今年こそは涙を見せまいと誓っていました。でも、母親たちがひとりずつ小さなプレゼントを受け取って、少女たちが私の列に近づいてくるにつれ、それまで何度も味わったあの気持がよみがえってきたのです。日曜学校に来なければよかった、母の日だけは……と思いました。

鉢植えのかわいい花は全部の列にまわり、もうひとつの花が渡されます。耳なれたささやきがまた聞こえました。「さあ、行って。いただきなさい。あなたが受けていいのよ。」そのとき、ぎゅっと握りしめた私の両手に小さな鉢を押しつけて、だれかがささやきました。「あなたはお母さんみたい！」と。

集会が終りました。私は後ろのドアから早く出ようとしたのですが、前を人や物でふさがれているようで、もう目の前のものが何か見わけがつきませんでした。涙で見えなくなっていたのです。私は「泣いてはだめ。模範を示さなくちゃだめ」と、自分に言い聞かせました。でも私の耳には、「あなたはお母さんみたい」という言葉がこだましていました。手には小さなベゴニアの重みがずっしりとこたえて、私をあざけるかのようでした。

その年も、やっぱり同じでした。「時がたてばどんな傷も癒える」ということわざを考えてみましたが、何年たっても傷は癒えません。私はまだ苦悩から抜け出せず、心は傷ついていました。そして、いつも心を悩ましている疑問が次第に大きくふくらんで、爆発しそうでした。私と永遠の伴侶は、生めよ、ふえよ、地に満ちよ、そして子孫を得て喜べという命令を与えられなかったのかしら。子供は生まれないのかしら。喜びはないのかしら、と。

私は、教会からほんの数丁の家へ急ぎました。でも寂しさはそこにもこだましていました。心を込めて用意してある、でもたったふたつの皿だけの夕食のテーブルから、私は目をそむけました。それと別の日、私はまたもっとつらい思いに耐えることになったのでした。

1週間後のこと、近所では見かけない小さな男の子が、家のドアをノックしました。私が戸をあけると、彼は一心に私を見上げて、「おばさんちの坊やと外でいっしょに遊んでいい？」と聞きました。

私は全身が寒けだつような気がして、かすれた声でやっと返事しました。「坊やはいないのよ。」

その子は不審げに聞きました。「おばさん、お母さんじゃないの？」

私はぶっきらぼうに、「そう、違うの」と言いました。

少年はまだわからないという様子で、子供らしい無邪気さから、私がそれまで口にするのを恐れてきた質問をあびせました。「お母さんでないんなら、じゃあ、おばさん、なあに？」

私は子供が帰ってから、心の底から叫びました。「愛する神様、母親でないのなら、私は一体何者ですか」と。そしてまた、あの疑問を。夫と私に対してはどんな計画をお持ちなのですか。私たちに何をさせようとお思いですか。

友人たちの幾人かは養子を迎えて、親の喜びを味わっていました。その子たちは実の子ではないが、まさに実の子のようでした。聖なる神権の結び固めによって、子供たちは永遠の家族となったのです。

私たちも養子を迎えたいと思いました。私たちは養子縁組が神のみ旨かどうかを知るために、たびたび断食と祈りをしましたが、聖典に言われているような心の鈍くなる感じがしたのです。

「されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感ぜしむ。されどもし願うところ正しからずば、かかる感なくして汝の心は次第に鈍くなり……」（教義と聖約9：8、9）

でもどうして、私たちがあんなに聖霊の確証を求めていたときに心が鈍くなったのでしょうか。私たちは、聖霊からはいという答えが得られるように、信仰を強くしたいと思いました。やがてやっと、ひとつの返事が来ました。

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」（箴言3：5）こと新しい聖句ではありませんでしたが、それが私たちの祈りの答えなのでした。

いろいろな思いが、次々と浮かんできました。主イエス・キリストへの信仰、それは福音の第一原則ではなかったかしら。すべてが主のよしとされるときに実現するという信仰。

私はその気持を夫のヒーバーに話したくてたまりませんでした。いつもどんなに遅くなっても、夫が集会から帰って来るまで起きて待っていましたが、それは、そのようなふたり一緒の時間がとても貴重だったからです。忠実な夫が神様の神権を持って召しを一生懸命果たしている家庭には無限の力の貯蔵庫があって、妻はそこから力を得ることができます。私はその晩、神様の声を告げる夫を通じて、別の祝福を受けたいと思っていました。私たちは信仰を強められて、今度こそ私たちについての神様のみこころがわかると思いました。

ヒーバーは私が話したがっているのを察してくれました。話の後で彼は私を慰め、祝福を与えてくれました。

主の霊感に導かれて、私たちふたりは共々、人生でめざすべき方向を見出しました。私たちは、デビッド・O・マッケイ大管長の「人生の最も貴い目的は、人の人生を幸福にしようと努めることである」という言葉を思い出したのです。夫は私を祝福した中でこう言いました。「あなたは愛すべき子供を持つ必要はありません。愛は所有することではありませんし、所有することが必ずしも愛することではありません。世間には、愛され、導かれ、教えられ、高められ、霊感を受けるべき人がたくさんいます。」

そして最後に予言者ジョセフ・フィールディング・スミスの言葉を一緒に読み返しました。「ふさわしい人が他の人には容易に与えられている祝福をこの世で受けられなくとも、忠実に生活して、主の戒めを能力の最善を尽くして守ろうと努めたならば、失うものは何もないであろう。そのような人は与えられうるすべての祝福を受ける。この世が終わり、完き生活がやってきたときに、主は彼に完きを償って下さるであろう。主はふさわしい人をひとりも見過ごしにはされず、彼に……与えられうるすべてのものを与えて下さるであろう。（*Doctrines of Salvation*「救いの教義」2：176 −177）

ヒーバーが静かに本を閉じたとき、ヒーバーの最後の言葉を聞くまでもなく、私の心は平安でした。

あのような気持になったのは、後にも先にもあのときだけです。朝日が昇って暖かな陽の光がだんだん世界を染め、やがて一点の雲もない空いっぱいに陽が満ちていくような穏やかな平安でした。

私たちは、自分たちの結婚が永遠で完全に向かって一緒に成長するのだということを知っていました。「わが父のもてるすべては彼に与えらるべし」（教義と聖約84：38）ということを知って、主を信頼してそのような時が必ず来ることを信じようと誓い合いました。それでもまだ疑問はあります。でもその答えもあるはずです。「その間、私たちは何をしていたらよいのでしょうか。」夫の言葉の中に答えがありました。「人生の最も貴い目的は、他の人の生活を幸せにしようと努めることです」と。

いつからそうなったのかは思い出せませんが、いつのまにか私たちの家庭は近所の方たちの活動の中心になっていました。我家にはいつもお客様が来ました。大人も子供も、「クッキーひとつお相伴したいわ」を口実に、訪問して下さいました。ヒーバーが家にいると喜ばれて、彼はいつも時間をとって皆さんのお話を聞き、自分も楽しんで、助言

をしたりしました。

その報いはいろいろ思いがけないときにやってきました。あるときは八百屋さんの店先で、店員さんがものを包んでくれて、自分から、「お宅のご主人には相談に乗っていただいて。いい方ですね」と言うのです。

また、あるお母さんがヒーバーにこんな感謝のお手紙を下さったこともあります。「息子にお話下さってありがとうございました。おかげであれからすっかり変わりました。お父さんなしではいられなかった息子が、今では伝道に出るのだと決心しています。お忙しいのに息子とお話して下さったこと、本当にありがとうございました。」

ある日、ひとりの少年が友だちに促されて、ドアの所にいた私のわきを通って台所に入ってきました。その子が私に、「だれでも来ていいんだって、ブラッドレーが言うから」と言っている間に、経験ずみの友だちはクッキーの引出しをいっぱいにあけてどれにしようかと選んでいます。私は笑いをかみ殺しながら、「そう、その通りよ」と答えました。私は、ふたりが真剣にクッキーを選ぶのを見ていました。かわいい食いしんぼさんたちは、宝物をこわきに飛び出して行きました。後ろ姿を見送る私の心は喜びに満たされていました。

その頃、小さな奇跡が起き始めていたのです。「われは人を謙遜にするために人に弱点を与うれど、すべてわが前にへりくだる者には充分わが恵みを授くるにより、かれらがわが前にへりくだりわれを信ずる時にはその弱きを強きに変えん。」(イテル12：27)かなわないものと思っている祝福が、ただ後に延ばされているだけのことがあります。また、とても重大なことのときにはそれが神様にもっと近くなり、心と心がしっかり結ばれるようにするための手段である場合もあるのです。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ28：20)との言葉通り、主は私たちと共におられるのですから。

何年かがすぐに過ぎました。友人の息子さんや娘さんたちが伝道に出たり、神殿結婚を計画したりするのを、一緒になって喜びました。やがて、まもなく孫が生まれるという人たちのうきうきした気持も一緒に味わいました。私がせつない望みを感じるたびに、ヒーバーは慰め、元気づけてくれました。

その歳月に、私たちは成長という進歩の機会を数限りなく祝福されてきました。隣人や若い人やお年寄のために働き、人生の賜を喜ぶ機会を。そして、あらゆる良いものの中に神様の力があることがわかるようになりました。

ある年の母の日の次の週のことです。届いた手紙をえりわけていると、1通の差出し人に目が止まり、もう1通も「私の娘たちのひとり」からだったのでとてもうれしくなりました。そのような手紙はたいてい、赤ちゃんの誕生とか大きな出来事の通知なのですが、その手紙の中身は違っていました。それは、久しく忘れていた祈りの答えのようでした。

「母の日のきょう、私が考えていることをぜひお便りしたいと思いました。私が小さかった頃、母の日にワード部で花を配ったときのことを覚えています。とても思い出深い経験でした。いつか自分もあんなふうにして立って、お母さんたちと一緒に讃えられたいと思いました。96歳のかよわいけれどとてもやさしい祖母のことを思うと、母の日は自分にとって特別なもののように思えました。私は自分の母の犠牲と愛や、いつも話を聞いてくれる義理の母のことを考えました。今私の腕の中には、私を信頼しきって笑顔をふりまいている小さな娘がいます。

でも、私は直接の母たちだけでなく、もうひとり、私の人生を変えた、母のようにいつも愛し、尊敬している美しい人のことも思い出しました。あなたのことを考えるだけで、自分が愛情深くなり、天のお父様の導きが必要なときにひざまずく気になったことがどれだけあったことか、知っていただけたらと思います。」

手紙を読むうちに泣けてきて、もうページが見えなくなりました。涙がほおを伝うままに、そのとき私はジムやカレンやベッキー、ポール、マーク、ミンディー、ワンダ、そのほか心から愛している大切な大勢の人たちにお手伝いをする特権のあったことを考えていました。知らず知らず祈りが口をついて出ました。「ありがとうございます、愛する神様。いやしいしもべたちをみ手の器としてお使い下さいました。『お言葉どおりこの身に成りますように』」(ルカ1：38)

私は涙をぬぐって手紙の先を読み続けました。

「私はあなたのことを心から愛しています。そして、あなたが主のみたまにいつも導かれて、まわりの人たちを祝福し続けられるようにと、祈っています。

あなたは私のお母さんのようです。

キャシーより」

(アーデス・G・カップ　主婦、若い女性中央管理会会員、バウンテフル・ユタ中央ステーキ部バウンテフル第29ワード部所属)

断食と祈り

スペンサー・J・コンディー

私たちはどうしたら、心から罪の汚れを取り除けるのだろうか。主は予言者イザヤを通して、私たちにこう約束された。「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」（イザヤ1：18）

私たちのしみに汚れた霊が再び清くされ、心の有様が主の目に喜ばしいものとなる、という主の言葉は、いかに慰め多いことであろうか。私たちが主のみ言葉に従って清めを受けることができるように、主はこの末日に次のように語っておられる。

「すなわち、主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり。さりながら、悔い改めて主の誡命を行う者は赦されん。」（教義と聖約1：31、32）

主は私たちが罪に染まらずに霊と体を清く保つように望んでおられる。主は地上の両親と同じように、私たちが皆、時には心にしみを残す行ないの誘惑を受けることを承知しており、次のように私たちに言っておられる。「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」

エペソ10：13

サタンの誘惑は決して耐えられないほどに大きくはないと約束されている。しかしながら私たちは、自分の中にある種の誘惑に対抗する力がないことをひとりで憂えたり、時には落胆したりすることがある。しかし主が予言者モロナイに語られたように、私たちの弱さはある賢明な目的のために与えられているのである。

「もし人われに来らば、われは彼にその弱点を認めさせん。見よ、われは人を謙遜にするために人に弱点を与うれど、すべてわが前にへりくだる者には充分わが恵みを授くるにより、かれらがわが前にへりくだりわれを信ずる時にはその弱きを強きに変えん。」）（イテル12：27）

アルマは主のお陰で、罪に汚れた心を清めることができた。

「しかし私がこのように責め苦しめられ、すでに犯した多くの罪を思い起して非常に良心に責められていたとき、神の子であるイエス・キリストと言うお方が、世の人の罪を贖うためにこの世へ来りたもうと言うことを、私の父が前に人民に予言をしたことを思い出した。そしてこれを思い出したとき、私は心の中で『神の御子イエスよ、永遠の死の鎖にしばられて今苦汁を飲まされている私を憐みたまえ』と嘆願をした。このように心の中で願うと、ごらん、私はもう少しも苦痛を覚えず、再び自分の罪を思い出して苦しむこともなかった。ああ、この時私の感じた喜びと、私が見た驚くべき光とはいかにも大きかった。まことに、私はこの時前に感じた苦痛にひとしいほどの喜びに満ちたのである。」（アルマ36：17―20）

聖典の中の主の勧めに従いさえすれば、完全な赦しの光と喜びは自分のものとなる。主は「へりくだる心と悔いる精神」（Ⅲニーファイ9：20）を持ち、自分の罪と弱さを謙遜に認めることを求めておられる。私たちはアルマのように、赦しを主に乞い願わなければならない。悔い改めの4原則は、(1) 認める、(2) 悔いる、(3) 償う、(4) 義に立ち返ることである。赦しには、相手の人に、あるいはもっと重大な罪の場合には監督に罪を告白することも含まれる。悲しいことには多くの若者が、（同様に大人も）、悔い改めてアルマが経験したような光明と清らかな気持を享受することをむずかしいことだと思っている。

若い人たちはよく「どうしたらもう一度清らかな気持が持てるでしょうか。私の心は何によって清められますか」と尋ねる。その第一歩として、簡単なふたつのことを提案したいと思う。

● 真心から正直に、自分の気持が神のみ座に達するまで祈り続ける。アルマの場合には、それに3日3晩かかった。イノスは丸一昼夜主を呼び求めて、罪が赦されたという確信を主から得た。

祈りの長さはさして重要ではない。大切なのは、神との交わりである。私たちは形式的な祈りしか教えていない宗教をうんぬんしながら、それと同じ空虚な祈りの繰り返しに陥っていることがある。確かに祈りが聞かれている、思いを通わせ合っていると心に確認できるまで祈るべきである。

● 断食する。祈りの言葉を発していながら実は祈りをしていないことがある。また祈りにも断食にも神と交わるだけの時間をかけていない場合がある。断食と祈りの行為は、心の汚れと十分に取り組んでこそ、完全に生きてくるのである。そうしてこそ、私たちは完全な者となる道を歩み始め、主の目にかなう清めを受けて、アルマのように圧倒されるような喜びを経験できるのである。

南太平洋地域総大会を終えて

南太平洋に住む教会員にとって、2月から3月にかけての16日間ほど満たされた日々はなかったことだろう。スペンサー・W・キンボール大管長をはじめ、他の教会幹部を迎えての地域総大会がサモア、ニュージーランド、フィジー、トンガ、タヒチ、そしてオーストラリアのメルボルン、シドニー、ブリスベーンの各地で開かれたのである。

キンボール大管長に同行した教会幹部は、N・エルドン・タナー第一副管長、十二使徒評議員会会員のブルース・R・マッコンキー長老、デビッド・B・ヘイト長老、十二使徒評議員会補助からはマリオン・D・ハンクス長老、ウイリアム・H・ベネット長老、ロバート・L・シンプソン長老、ロバート・D・ヘイルズ長老、管理監督会のビクター・L・ブラウン監督、七十人最高評議員会会長のローレン・C・ダン長老である。

この一連の地域総大会の幕明けは、2月15日、アメリカ領サモアのパゴパゴであった。西サモアのペセガで開かれる大会に出席できない会員のために特別大会が開かれたのである。この会には1000名もの会員が集った。

翌日、大会は西サモアへと移った。聖徒たちはよい天気になるようにと断食して祈った。その結果、一週間も続いた暴風雨はぴたりと止み、大会当日の空はきれいに晴れ上がっていた。

キンボール大管長とその一行はウポル島のペセガに到着すると、西サモアの大統領、首相、その他サモアの主だった教会指導者の歓迎を受けた。会員、非教会員を含めた5,000人以上の群衆の前で、キンボール大管長に敬意を表して厳粛なカバ※の儀式が行なわれた。このカバの儀式は賓客高官に贈る、サモアで最高の敬意を示すものである。

儀式が終わると、祝宴が催され、数々の贈物が渡された。その日は各ステーキ部の会員たちの演じる文化プログラムで終わった。

教会幹部は大会の中で、サモアにいる130人の宣教師のうち80パーセント以上が地元出身者で占められていることは大変喜ばしいことだと口々に述べていた。キンボール大管長は系図と伝道を行なうことが、地元に神殿を建てるうえで欠くことのできない準備になると、その大切さを強調していた。また、ポリネシア人はニーファイ人ハゴツの子孫であり、イスラエルの集合の大切な役割を果たすのはすべての宣教師であると語った。

また、キンボール大管長は、サモアの会員たちが非常に高い神殿結婚率（70パーセント）を示していることを賞賛した。また、さらに地元でその業に励むよう強調して、次のように語った。「この大会を契機に、サモアでは教会のどの部分においても霊性が怒涛のように高まってこなければならない。そうでなければ、恐らく私たちがこの地を訪れたことは無駄に思えてくるだろう。」

予言者と他の教会幹部はサモアを後にすると、次の大会開催国ニュージーランドのオークランドに向かった。そこでキンボール大管長は昼食会を催し、ニュージランドの首相を招待した。それから、一行は大会の開かれるハミルトンを訪れた。

キンボール大管長と姉妹が軽い風邪で休息をとったため、伝統的なマオリの歓迎の儀式には、代わってタナー副管長と他の教会幹部が出席した。緑色の石棒を持ったひとりの兵士がタナー副管長の前に進み出て、伝統的な戦いのしぐさを見せ、歓迎の儀式に移った。

その夜、3000人の人々によって、マオリ・ポリネシア文化のプログラムが繰り広げられた。続いて、土曜日と日曜日には一般大会が開かれた。

当時、ニュージーランドは48年振りに雨の多い夏であったにもかかわらず、大会開催中は好天に恵まれ、彼らにとってこれほどの祝福はなかった。というのも、一般大会はチャーチ・カレッジの屋外競技場で開かれることになっていたからである。大会の出席者数は16,000名にも上った。

このあわただしい大会の次の開催地は、フィジーのスバであった。そこでは800人の会員が集まったが、中には1,200キロも離れたニューカレドニア島から遠路やってきた会員もいた。

2月23日、月曜日、教会幹部はわずか6時間のうちに歓迎会、文化プログラム、そして一般大会を終え、一夜を過ごすと翌日はトンガに向けて飛び立たなければならなかった。

教会幹部がフィジーに滞在した期間は短かかったが、大会の雰囲気は末永く会員たちの間に留まることであろう。

数多くの人々の気持を表わして、ある会員はこう述べている。「私は本当に証を強めることができました。今まで以上に福音を実践し、主のために働かなければと感じています。」

どの地を訪れても同じであるが、トンガでも教会幹部は会員たちの熱狂的な歓迎を受けた。空港では、音楽隊と200名以上の踊り子たちの歓迎を受け、伝道本部では、伝道的なカバ（カワカワ）の儀式が行なわれ、一頭の大きな豚が贈られた。

キンボール大管長、タナー副管長、シンプソン長老、お

よびデビッド・ケネディー兄弟は首相兼摂政皇太子のファタエヒ・ツイペレハケ皇太子殿下と公式会見した。(当日、国王タウファアハウ・ツポウ4世は家族と共に外遊中であった。)

その日の夕方、キンボール大管長と他の教会幹部は盛大なトンガ式夕食会に招待された。そこには180頭余りの豚の丸焼きが並べられていた。文化プログラムでは、1000名を越える会員たちの踊りが披露された。大会前日から降り続いた雨で雨量は300 ミリにも達し、舞台となったラグビー場はひどいぬかるみになっていたが踊りは熱心に繰り広げられたのであった。

大会で、トンガの会員たちは教会幹部や地元の神権指導者から数々の霊感あふれるメッセージを耳にした。キンボール大管長はトンガ人はトンガに留まって、この地にシオンの花を咲かせるようにと激励し、「トンガはシオンである」と語った。また、トンガから数多くの宣教師が出ていることを賞賛し、さらに一層の努力をするようにと励ました。

オーストラリアの大会は、シドニー、ブリスベーン、メルボルンの3箇所で開かれた。シドニーの会場は美しいシドニー・オペラ・ハウスであった。このオペラ・ハウスは1851年、オーストラリアに初めてモルモンの宣教師が上陸した地点のすぐ近くにある。

日曜日の大会午前の部は、10局のテレビ局から、オーストラリア全国に放映された。その時、キンボール大管長は予言者の特質について次のように語っている。

「主の予言者たるに、あらゆる面に秀でている必要はない。また、若々しいスポーツマンであることも実業家や資本家である必要もない。…… 主は弱い者を強くし、神のメッセージを伝えられる。モーセのごとく、静かで小心な者の声を強くし、若いエノクには人々が身震いするほどの力を与えられた。なぜなら、エノクは神と共に歩いていたからである。……

世が必要としている予言者とは、清く揺るぎない信仰と汚れない名前を持った最愛の夫、真の父親であり、神のような属性を具えた指導者である。」

日曜日の朝の放映に備え、宣教師や会員たちは10万人以上の友人、隣人に、テレビを視聴するようパンフレットを配った。放映が終わると、何百通もの手紙が寄せられ、その中のある視聴者の手紙にはこう書かれていた。「これほど素晴らしい経験をしたことはありません。」

また、別の手紙には、「この霊感に満ちたテレビ番組を見て、私の心は神と隣人への愛で一杯になりました」と書かれていた。

日曜日午前の部の大会が開かれているとき、オペラ・ハウスの会場に入れない人々のために、大会をテレビ放映しているホールに、ひとりの老婦人が現われてこう尋ねた。「私も中に入ってよろしいでしょうか。」すぐに、案内係は彼女を席に案内した。大会が終わると、彼女は案内係に向かってこう言った。「ありがたいことです。私はこれを81年間も捜し続けていたんですよ。」そして自分の家の近くにある教会の住所を尋ねていた。

さて、最後の大会開催地はタヒチである。大会は3月1日と2日の2日間にわたって開かれた。オーストラリアでは行動を別にしていた教会幹部たちはここで再び合流することとなった。

タヒチでも同様に、会員たちはキンボール大管長に大きな愛を示した。数々の贈物が出され、歓迎の歌と踊りが披露された。

予言者もまた人々に愛を示した。タヒチでも彼は「私たちは皆さんを愛しています」と繰り返し述べていた。そのような愛の精神があふれる中で、キンボール大管長は会員たちに向かって次のような勧告を与えた。「福音は万民のためのものである。タヒチの人々にとって、この美しい島こそシオンである。聖徒の集合はあなた方のためであり、私のためでもある。私たちは隣人にこの福音の真の価値を知らせるために、忙しく忙しくかけ回らなければならない。この大切なチャレンジを決しておざなりにしないようにしていただきたい。

あなた方が子供たち一人一人を天父のようになるよう育てるときに、主のみたまが豊かに注がれるように。」

教会幹部の伝えるメッセージを聞いたのは、タヒチに住む会員たちだけではない。火曜日の朝、キンボール大管長一行はタヒチの新行政官チャールズ・シュミット氏を訪問した。シュミット氏は直ちに午後のスケジュールを調整し、大会の最後の部に出席した。そして「私たちはあらゆる時代を通じて最大のメッセージを携えている」と述べたマッコンキー長老の言葉を聞き、また簡潔に、しかも力強く、イエス・キリストの福音の回復について詳しく説明した説教を耳にしたのである。

大会を閉じるに当たってキンボール大管長は聖徒たちにこう繰り返した。「私たちはこの業に真剣に取り組むものである。今まで耳にしてきたことは、あなた方にとって非常に大切なことである。それを自分の生活の中で実行していただきたい。これで大会を閉じなければならないというのはとても耐え難い心境である。」

それから、タヒチの聖徒たちの思いを託した別れの歌が歌われる中を、教会幹部は立ち上がった。今まで、どの大会でもこれと同じ光景が繰り返されてきた。

キンボール大管長は会員たちに手を振っていた。近くに立って歌っている人々の顔、小刻みに震える唇、涙で潤んだ目をじっと見ていた。

それからキンボール大管長は愛する会員たちのところにゆっくり近づいて行った。

※カバ: カバ（カワカワ）の木の根を乾燥させ、粉末状にしたものを水にといて作った飲み物。厳粛なカバの儀式では、カバの椀、緑色のカバの根、マット、その他豚の丸焼きなどの贈物と共に、尊称の授与が行なわれる。

私の結婚観

日本札幌伝道部
札幌第２支部
西川美和子

女性を男性より一段低く位置づけて考える習慣は、昔からある特殊な例を除いて世界中の殆んどの地域にあって知られていることでした。その考えを打ち破るために「ウーマンリブ」を叫ぶ人々がどんどん増えてきています。常に男性と同じ位置にいるためにはあえて結婚せず、また子供を生まないようにしようとする傾向にあります。たくさんの子供を生み、家庭の中で家事をし、夫や子供のために働くことがもはや流行遅れであるかのように考えられています。しかしもし私たち女性が女性であることを放棄してしまうならなぜ女として生まれてきたのか、全く意味がなくなってしまいます。福音を知らず、末日聖徒になる前には自分に対してあまり自信がなくまた誇りも持てず、意味のない一生を送るべく毎日を過ごしていました。世の慣習に従い、20代半ばで結婚しようというただ漠然とした考えの中にいて、しかも自分の手に負えない問題に遭ったときには逃げ出すことしか考えられない人間でした。しかし福音を知り、救いの計画を知って、末日聖徒になってからは、自分がこの世にいることがいかに意味深いことであるか、またなぜ私が女性として生まれてきたのか、そして結婚し子供を生んで育てるということがいかに重要であるかを知ることができました。世の流れに押されて女性としての役割と目的を見失わず、しかもそのことを深く認識できる末日聖徒となれたことは大きな祝福であります。しかし、その素晴らしい福音を受け入れた結果、一般社会とはうまくかみ合わない問題や困難も数多く出てくるのです。独身女性にとって特に結婚は大きな問題です。いかに結婚が大切であるかを知ったときに私たちは愛する伴侶と神殿において永遠に結ばれたいと強く願います。しかし末日聖徒ではない人と知り合う機会の多い中で、彼らと結婚することもあります。俗にいう結婚適齢期を過ぎても結婚していないという負い目からある程度は妥協して「オールドミス」という嫌な呼び名から逃げ出そうとして結婚する場合もあります。相手が福音を受け入れない人の場合、また私が信仰を持ち続けていきたいと強く思えば思う程、多くの困難が伴ってきます。女なしで男はないし、男なしで、女はなということで、私たち結婚するのに充分な年齢の女性が一人でいるということは、心身共非常に不安定な状態になります。しかしそれだからといって、ただ独身でありたくないという理由から早まった結婚をすれば、一人でいるときに思い悩む問題よりもはるかに大きな問題がおきます。私はまだ結婚していませんが、神様の目から見て、「今こそ伴侶を与えるべきとき」迄、私は多くの試練をも成長するための糧として喜んで受けたいと思います。努力し、忍耐し、多くの神様のことを実行するときに、神様は年齢の多い少ないに関わらず、それぞれに祝福を与えて下さいます。

私たち末日聖徒の姉妹たちは、なぜ私たちがこの世にいるのかをよく知っていますから、常に前向きで、本当に大きな価値ある目標を持って生活しています。何事も死ねば終ってしまうと考えている人々の話を聞くと、彼らの生活の中には度々終点が出てきます。学校を卒業したからもう勉強はしなくてもよい。結婚してしまったので自分を美しく見せる必要はない。子供が大きくなってしまったので余暇を持て余している、等々。永遠に進歩していくことを知っている末日聖徒は、育児に追われ、家事に忙殺されても、本当によく努力し、勉強しています。末日聖徒ではない人々の中にも生涯教育といって、頑張っている人はいますが、本当にその数は少なく勉強し何かをしようとして努力している人々も全て死ぬ迄のことと思っているのです。もし自分の永遠進歩のために、毎日毎日の生活を充実したものに変えられると知った勤勉な人々は、諸手をあげて、喜びの声を上げることでしょう。私たちが福音に添った生活をすることがいかに大切か、全ての人々がそれを知り実行しなくてはならないのです。自分自身の見方を変え、何事にも神様のみ心を感じることができ、私自身を大切にしなくてはならないことを知ったことは本当に神様からの大きな祝福と感謝しています。尊き御子イエス・キリストのみ名により。アーメン。

公告

規則第18条の定める手続を経て、下記の通り教会支部用地を買収しましたので宗教法人法第22条の規定によって公告します。

昭和51年３月26日
宗教法人「末日聖徒イエス・キリスト教会」
代表役員　グレン・アール・ハンディ
会員その他利害関係人各位殿

岡山支部用地	昭和49年３月４日
室蘭支部用地	４月26日
大阪ステーキ部センター、高槻および吹田支部用地	４月27日
ひばりが丘ワード部用地	５月22日
鹿児島支部用地	５月23日
横浜ステーキ部センターおよび町田ワード部用地	６月18日
旭川支部用地	11月13日
熊本支部用地	11月21日

聖　徒　の　道　　1976年5月20日発行（毎月1回20日発行）　第20巻第5号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし。

（教義と聖約13章）

正にアロンの如く召して聖職の按手任命を受けしめんがために、汝らわが僕たち、ジョセフ・スミス（二代目）とオリヴァ・カウドリを汝らが受けたる小神権に按手任命するためわが遣わしたるかのヨハネと共に飲み、……

（教義と聖約27章8節）